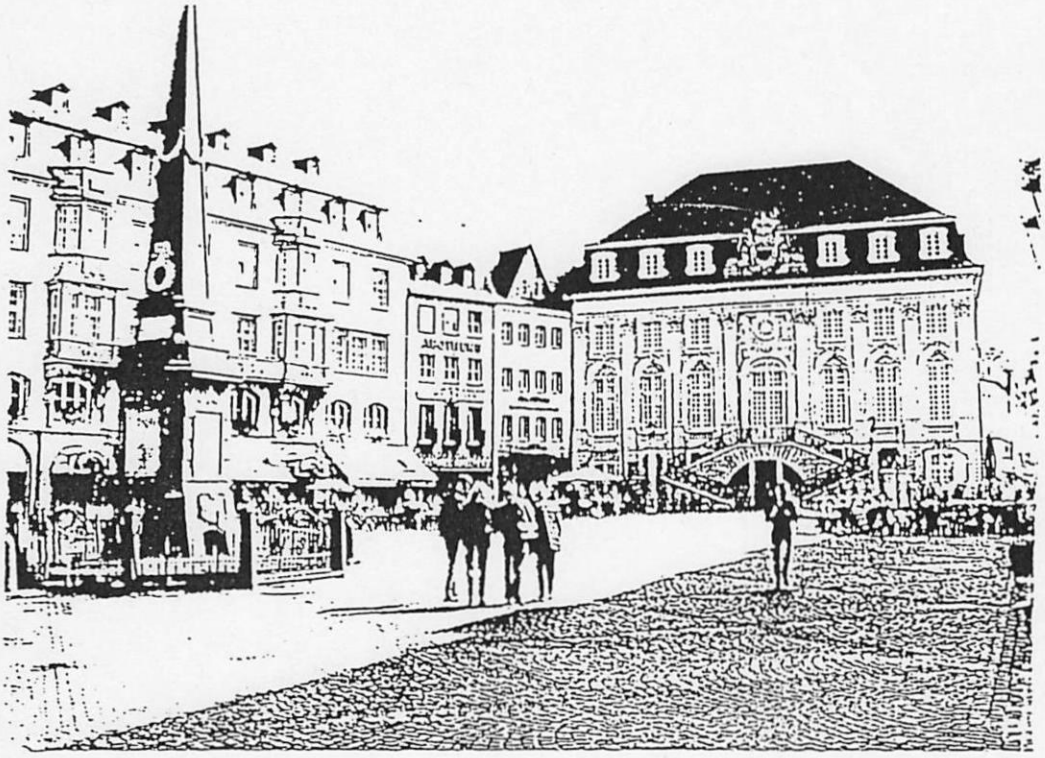
香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA



第３号

Okt. 1994

『ボン独日協会との姉妹協会提携調印式』を挙行

去る１０月１７日（月）午後６時３０分からホテル川六「春日の間」において、「ボン独日協会」と「香川日独協会」との間で姉妹協会提携の調印式が行われました。

ボン独日協会から代表として、ディーツ会長（Wolfgang Dietz）、メンヒ副会長兼事務局長（Marianne Mönch）、ヘルマン会計補佐（Gisela Herrmann）、ドクター　メンヒ会員（Dr. Dieter Mönch）、ディーツ会長のジルケお嬢様（Silke Dietz）の５名が調印式のために来県されました。

姉妹協会提携調印は、ボン独日協会代表団と香川日独協会会員８０名余が見守る会場で、ボン独日協会ディーツ会長、メンヒ副会長兼事務局長、香川日独協会細川会長、羽白事務局長が、厳粛ではありますが、暖かい雰囲気の中で、ドイツ文と日本文の提携書にそれぞれ署名し、提携書を交換し、滞りなく行われました。

引き続いて、ボン独日協会代表団の皆様方の来県をお祝いして歓迎会が催されました。歓迎会は、多田野副会長の開会挨拶、中村副会長の乾杯の発声で始まり、ボン協会からネクタイピン、ボン市内の写真などが当協会へ贈られ、小山照子様のお祝いの日本舞踊、ボン協会の皆様方と当協会会員の青年達とのそれぞれの国の唄の交換もなされ、ボン協会代表団の皆様方を歓迎するとともに姉妹提携をお互いに慶び、今後より一層の交流を深めることを誓い合い、大変な盛会でした。

また、翌１８日午前１０時から高松市中央公園内で両協会による「樅の木」の記念植樹が行われました。

なお、この姉妹協会提携が結ばれました経緯につきましては、会報第２号の４頁、５頁に中村副会長が詳しく記されておりますので、ご覧ください。

◇細川香川日独協会会長挨拶

ボン独日協会
会　　長　ヴォルフガング・ディーツ
事務局長　マリアンネ・メンヒ　　様

この度は香川日独・ボン独日、両協会の姉妹提携調印に際し、はるばる遠く香川の地まで足を運ばれ、こうしてうれしい会をもちえましたことを大変幸せに思いますとともに心から歓迎し、あわせて御礼申し上げる次第です。

日独関係の歴史は古く、今更申し上げることもありませんが、特にこの日独協会につきましては、すでに多くの日本の都市に古くから設立されております。こうした中で、私達の香川日独協会はなお日も浅く、やっと1991年10月13日にわずか１００名を越す会員で船出を致しました。

こうしてわずか２年有余のうちに、ここにボン独日協会と姉妹関係を持ち得ましたことは、なんと申しましょうか大変な名誉であり、又、幸運と言うべきでしょうか。香川県という日本における位置、立場からして、ボンとの提携は、私達にとっては、むしろ不釣合の感を憶えるほどです。

当地香川はご承知と思いますが、北に瀬戸の海をもち、実に風光明媚の景勝地で気候温暖、災害すくなく、文化水準も日本有数であると言われています。そして数多くの歴史的人物を輩出し、故事来歴の豊かな土地であります。

ボン独日協会の方々も、きっとこの提携を通じて日本文化の真髄を十分に味合っていただけるものと確信しています。

香川日独協会の会員諸士も、ボン独日協会との交流を通して、ドイツに関する文化的側面を知り、会員相互の親睦、ドイツ語の学習、相互のホームステイの実現などに意欲を燃やしております。日本とドイツの時差は８時間、空の便で12時間の距離ですが、両協会の熱意でこれを全く隣同志という近さになるものと確信しております。

最後に、ボンにあります独日協会のすべての皆さんに、心からの御礼のメッセージを送り、ここに、両協会の姉妹提携設立の御あいさつとする次第です。

１９９４年１０月１７日
香川日独協会長
細　川　　清

◇ディーツ　ボン独日協会会長挨拶

Takamatsu, 17.10.1994

Sehr geehrter Herr Präsident,
meine sehr verehrten Damen und Herren,

ich freue mich sehr, heute anläßlich der Unterzeichnung dieses Partnerschaftsvertrages ein paar Worte an Sie richten zu können.
Die guten Beziehungen zwischen unseren Völkern haben eine lange Tradition, die bis auf das Ende des 17. Jahrhunderts zurückgeht und mit den Namen der deutschen Ärzte und Forschungsreisenden Engelbert Kaempfer und Philipp Franz Siebold eng verbunden ist. Darauf möchte ich jedoch hier nicht näher eingehen. Vielmehr liegt es mir am Herzen, Ihnen etwas über die Gesellschaft zu sagen, mit der Sie diesen Partnerschaftsvertrag abgeschlossen haben. Denn sicher wissen nur wenige von Ihnen, mit wem Sie sich da eingelassen haben und was Sie erwartet, wenn Sie nach Bonn kommen, um unsere schöne Stadt etwas näher kennenzulernen. Bonn ist nicht Heidelberg oder Rothenburg, auch kein München mit seinem Oktoberfest. Dafür hat es Vieles zu bieten, was andere Orte nicht haben. Als Geburtsstadt Beethovens beherbergt Bonn ein leistungsstarkes Sinfonieorchester und ein sehr bekanntes Opernhaus. Die Rheinländer sind weltweit als fröhliche Menschen bekannt und verstehen Feste zu feiern, zu denen auch immer der vorzügliche Rheinwein gehört, der entlang des Rheins bis hinauf nach Bonn angebaut wird.
Als eine alte Universitätsstadt ist Bonn heute nicht nur Sitz einer großen Universität sondern auch Sitz von 95 weiteren zentralen wissenschaftlichen und kulturellen Institutionen. Und schließlich war Bonn auch über 40 Jahre Hauptstadt unseres neuen, demokratischen Deutschland.
Regierungssitz und Stadt der Wissenschaft haben nicht zuletzt mit dazu beigetragen, daß sich Bonn durch eine Bevölkerungsstruktur auszeichnet, die sich anderswo in Deutschland kaum wiederfindet. Dies spiegelt sich auch in der Mitgliederstruktur der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn wider. Obwohl keine der ältesten, ist sie doch eine der größten Deutsch-Japanischen Gesellschaften in der Bundesrepublik Deutschland.

Sie wurde im Jahre 1976 von dem damaligen Direktor des Japanologischen Seminars an der Universität Bonn, Herrn Prof.Dr.Herbert Zachert, gegründet. Zu ihren z.Zt.480 Mitgliedern zählen auch viele Japaner, die ihren dauernden oder auch nur vorübergehenden Wohnsitz in Bonn haben. Zu ihnen gehören Hochschulprofessoren und Studenten der unterschiedlichsten Fakultäten, Botschaftsangehörige, Regierungsbeamte und japanbegeisterte Bürger der verschiedensten Berufsgruppen.
Entsprechend ist auch unser Veranstaltungsprogramm ausgerichtet. Es umfaßt Vorträge zu den unterschiedlichsten Themen, Filmabende, Besichtigungen, Diskussionsabende sowie gemeinsame Besuche interessanter kultureller Institutionen, wie Museen etc. Aber auch fröhliche Weinproben und lustige Kegelabende bis hin zu gemeinsamen Tagesausflügen in die nähere und weitere Umgebung Bonns und jährliche Jahresabschlußfeiern gehören dazu. Letztere werden abwechselnd von unseren deutschen bzw. japanischen Mitgliedern gestaltet. Sicherlich werden Sie die eine oder andere Veranstaltung selbst einmal besuchen können, wenn Sie uns demnächst in Bonn besuchen.
Nun werden Sie sich sicher fragen, warum bei all diesen Aktivitäten auch noch einen Partnerschaftsvertrag mit Ihnen abschließen. Die Antwort ist relativ einfach. So erhoffen wir uns zum Beispiel durch die künftigen gegenseitigen Besuche unserer Mitglieder im Rahmen eines Homestay-Programms, daß die daran Beteiligten Land und Leute des jeweils anderen Landes besser kennenlernen und persönliche Freundschaften anknüpfen werden. Darüber hinaus wünschen wir uns einen Gedankenaustausch zu allen, beide Seiten interessierenden Fragen. Wir hoffen so, einen sehr konkreten Beitrag zu der heute oft beschworenen Sicherung eines von uns allen ersehnten dauerhaften Friedens auf dieser Welt leisten zu können.
In diesem Sinne wünschen wir uns, daß dieser Partnerschaft ein voller Erfolg beschieden sein möge.

◇ディーツ会長挨拶の邦訳文

1994年10月17日　高松にて

会長並びにご列席の会員の皆様、

本日両協会の姉妹提携調印に際し、皆様にご挨拶できますことは私にとりまして大きな喜びでございます。

日独両国民の良きつながりはすでに長い伝統を持ち、17世紀の末に遡ります。ドイツの医師であり、学術探検家でもあったエンゲルベルト・ケンプファーとフィリップ・フランツ・シーボルトの名前はご存じのことと思いますので、本日この席でそれについて述べるつもりはございません。本日は、私どもボン独日協会について一言述べさせていただきたく存じます。と申しますのは、この姉妹提携により、一体どんな協会と係わりあうことになったのだろうかとお考えの向きもあろうかと存じますので。皆様方が、私どもの街ボンを身近に体験しようとおいでになったら、一体何が皆様を待ち受けているのであろうかなど、いろいろ分からないことも少なからずおありだろうと拝察しております。ボンはハイデルベルクやローテンブルクとも違いますし、また、オクトーバーフェストで有名なミュンヘンとも異なります。ボンはほかのどこの都市にもない、いろいろなことを見せてくれます。楽聖ベートーベンの誕生の街として、ボンには立派な交響楽団とすばらしい歌劇場があります。ライン地方の人はその陽気な気質で知られ、お祭りがことのほか好きです。きっとライン河に沿ってボンまで続くブドウ畑からできる一流のライン・ワインがそういった気質に一役かっていることに間違いないでしょう。

一方古い大学街としてのボンには現在、大学のほか、95の学術・文化の諸機関の本部が居を構えております。また、何と言ってもボンは戦後40年の新しいドイツの民主主義の顔を刻み付けた都市であります。

政府所在地であり、学術都市であるというボンは、ほかのドイツの都市には見られない独特の住民構成を見せております。ボン市のこの独特な住民構成は独日協会会員の構成にもよく反映されています。当協会はドイツの一番古い協会という訳ではありませんが、最も大きな協会の１つに上げることができます。当協会は1976年、当時ボン大学日本学教授であったヘルベルト・ツアッヘルト博士により創設され現在約480人の会員数を誇っております。ボンに滞在する日本人会員も少なくありません。私たちの会員には大学関係者、教授、様々な学部の学生、大使館員、ドイツ政府関係者を初めとして、あるゆる職業に携わる人がおります。その共通点は日本大好きということです。私たちが催すプログラムもそれにした

がって大変広範囲です。あらゆるテーマを取り上げる講演会、映画会、見学会、討論会、文化施設や美術館の訪問など興味深いものがたくさんあります。そうした催しだけでなく、楽しいワイン試飲会、愉快な九柱戯(Kegeln)、ボン近郊から遠出の遠足など広範囲にわたっています。年末の忘年会（クリスマスパーティとも言える）も忘れてはならない大事な行事の一つです。この催しは日本人会員とドイツ人会員が毎年交替で企画することになっています。皆様がボンにおいでの際はきっと私どもの催しに参加される機会が作られる事でしょう。

こうした活動があるのに、それに加えて又どうして皆様の日独協会と姉妹提携を結ぶのかという疑問を持つ方もいらっしゃるかも知れません。答えは簡単です。それは例えばホームステイ・プログラムを通じて、お互いに会員同志が訪問しあい、お互いの国と国民をよく知り、個人的な友情を培うこと、さらに両者にとって関心のある問題について互いの考えを交換できるようになることを私たちは心から望んでいます。こうした試みを通じて、世界の平和が続き、またそのために具体的に何らかの貢献ができるのではないでしょうか。この意味で本日の姉妹提携が豊かな実りをもたらしてくれますよう、心から祈っております。ありがとうございました。

◇丸田芳郎（財）日独協会会長からのメッセージ

平成６年１０月１３日

香川日独協会
会長　細川　清　様

財団法人　日　独　協　会
会　　長　丸　田　芳　郎
千代田区大手町２－７－１
日本ビル別館1313区〒100
Tel.3270-3770/Fax.3270-3282

拝啓

清秋の候　ますますご清祥のこととお慶び申しあげます。

今般のボン独日協会との姉妹協会縁組に対し、心よりお慶び申しあげます。両協会の交流がますます盛んになりますよう、心よりお祈りしております。

敬具

Ｐ．Ｓ．　尚、せっかくご案内を頂戴し、是非出席したいと思いましたが、あいにく業務多忙により、当日は欠席させていただきます。悪しからずご了承ください。

◇有馬龍夫在ドイツ日本大使からのメッセージ

香川日独協会とボン独日協会の協力協定の調印を心からお祝い申し上げます。

日本とドイツは地理的には遠く離れた国でありますが、時代を越えて信頼と友好の関係を育んできました。それを支えてきたのが、日独協会、独日協会に代表される両国の親日家、親独家の方々であったことは改めて申すまでもないことです。情報化社会とか国際化といいながら、ともすればお互いを見失いがちな世界にあって、市民レベルの血の通った堅実な交流が一層必要となってきております。今回、香川とボンの両協会が、協力協定をとりかわし、会員相互のホームステイや地域事情の交換等を通じて、交流を深めていかれることは、日独両国の友情の絆を更に強めていくものとして、誠に意義深いものです。

また、日独両国のように、豊かで多様な地域文化を有する国は、地域に根ざした交流が相互理解に欠かせぬものです。このような観点からも、共に古い歴史と文化を誇る香川とボンの交流は、必ずや実り多いものとなることでしょう。

緑豊かな古い大学町であるボンは、また復興から再統一へと至る戦後ドイツ政治の表舞台としてその重責を果たしてきた町でもあります。一方、瀬戸内海に臨む香川は、風光明媚は言うに及ばず、古代から文化の開けた地域であります。それぞれの歴史や風土に触れて、香川、ボン、両協会の会員の方々が、日本に対する、あるいはドイツに対する関心や理解を一層深められるものと確信しております。

両協会の交流の発展を心からお祈りします。

在ドイツ日本国大使館
大　使　有馬　龍夫様
（ボン独日協会名誉会長）

◇グルーベル　ドイツ総領事からのメッセージ

本日ここに、ボン独日協会・香川日独協会姉妹協会提携調印式典が執り行われるに当たり、心からお慶び申し上げます。

姉妹協会提携がめでたく実現し、今後香川県でもボン市でも様々な分野での交流が活発に行われることを期待しております。

両協会の今後の活動につきまして一応お知らせなさってくだされば、幸いです。

大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
総領事　Dr. ニルス・グルーベル様
（Dr. Nils Grueber）

ドイツ連邦共和国総領事来高

1993年10月に着任された大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事ニルス・グルーベル氏を高松に迎え、８月３日、ホテル川六で "Deutschland und die deutsch-japanischen Beziehungen"（ドイツ及び日独関係）の演題でお話いただきました。講演後、活発な質疑応答・意見交換も行なわれ、部屋をかえての歓迎懇親会にも40名程参加し盛り上がった一夕でした。

講演の全文（羽白理事訳）は、つぎのとおりです。

ドイツ及び日独関係（Deutschland und die deutsch-japanischen Beziehungen）

1）統一後３年経ったドイツ（Deutschland drei Jahre nach der Vereinigung）

1.1. 共産主義崩壊後の世界政治の変化（Die Veränderung der Weltpolitik nach dem Zusammenbruch des Kommunismus）

ドイツもその他のすべての国々と同様に世界の政治経済体制の一員であります。この体制は共産主義の崩壊に伴い、凄まじい歴史的転換期を迎えました。冷戦(der Kalte Krieg)は終結、鉄のカーテン(der eiserne Vorhang)は姿を消し、ドイツは再統一しました。攻撃的で拡張主義のイデオロギーとしての共産主義が世界政治に影響を及ぼすこともなくなりました。今では、ほんの一握りの国々が共産主義を信奉しているに過ぎません。ソ連(Sowjetunion)とその衛星国家(Satelliten)からなるいわゆる「東欧ブロック(Ostblock)」は解体しました。この衛星国は、国家としての政治的自立(Selbständigkeit)を再び獲得し、ソ連も解体、それぞれの民族構成に従って分割されました。これによって、第二次世界大戦後、ほとんどすべての国の外交政策を明確に色付けしてきた友好国・敵対国という図式は消え去りました。東西対立(Ost-West-Konflikt)が南北対立(Nord-Süd-Konflikt)に変わってきました。とはいうものの新しい世界秩序(Weltordnung)といったものはありません。以前にも増して世界が見えにくくなりました。共産主義の脅威こそ無くなったものの、他の問題が新たに発生してきました。ヨーロッパ(Europa)には、民族構成ごとに分断され軍事力(militärische Gewalt)が力の要因になってしまった旧ユーゴスラビア(Jugoslawien)の例があり

ます。東アジア(Ostasien)にも核疑惑で最近よく記事になる国があります。将来的には、経済的・社会的な対立が本質的にもっと重要性を帯びる事でしょう。

1.2.統一後のドイツ(Deutschland nach der Vereinigung)

ドイツ再統一(Wiedervereinigung)は、国家の法律的な観点から見れば、東ドイツがドイツ連邦共和国、すなわち西ドイツの憲法(Verfassung)、法秩序(Rechtsordnung)の国家地域(Staatsgebiet)に編入(Beitritt)されるという形で行なわれました。ところで、内面的な統一の過程は、当初の予想よりも遥かに困難で、大変お金のかかるものとなりました。ほぼ45年にわたって、東西両ドイツは、お互いに全く独立して発展してきました。一方では市場経済(Marktwirtschaft)を本流とする民主主義(Demokratie)、もう一方では、統制経済(Kommandowirtschaft)下の共産主義中央集権国家。これほど大きな対立(Gegensatz)が想像できるでしょうか。東ドイツでは、共産主義ドクトリン(Doktrin)にのっとり、生産手段のために私有財産(Privateigentum)は大方没収されていました。つまり企業家は公的没収の対象となりただ単に国のために尽くす人(Staatsbedienstete)として自分の企業で働くことしか許されませんでした。土地所有権(Grundeigentum)、したがって、家屋の所有権(Wohnungseigentum)も東ドイツでは大幅に修正されていました。つまり、単に使用権(Nutzungsrechte)が認められただけで、所有権(Eigentum)は大方、形骸化、空洞化していたのであります。しかし、所有権というものは、市場経済が機能するための基礎ですから、再統一の後で、東ドイツに市場経済を導入するに当たって、予想もしなっかた障害が発生しました。登記簿(Grundbuch)、つまり土地所有権の公けの登録証の再発行だけのために突如として 3,000人もの専門家が必要になりました。登記簿の更新と所有関係の解明作業に、これから数年かかると思われます。

何千もの国営企業(verstaatlichte Industriebetriebe)が再び民営化されなければなりませんでした。この民営化を目的として設立された信託公社(Treuhandanstalt)も今では、大方その任務を終えた所であります。

しかし、ドイツの内面的な統一(innere Einheit)を完成するためには、すべてのドイツ人の発想の転換も必要です。とりわけ新連邦州(neue Bundesländer)、東ドイツに住む人達に新しい考え方が求められています。共産主義イデオロギー(Ideologie)の消滅に伴い、行動をとるにあたっての最も重要な規範(Richtschnur)

が東の人達からなくなりました。西では大方の事を自己責任(eigenverantwortlich)で行うのが通例でしたが、これに対して、東ドイツの人達の行動はとりわけ命令(Befehl)と服従(Gehorsam)という形で決められていたのです。東の人達はこの共産党(Kommunistische Partei)の神格化された力にすっかり慣れきっていました。この東の人達が今、完全に新しい環境に合わせてゆかねばならないのです。彼等は自ら率先してアイデアを出し、自らの行動に責任を負う事を学ばなければなりません。西ドイツでは人口のほぼ９割がキリスト教です。これに対して、東ドイツでは、長年の無神論、反宗教プロパガンダ(Propaganda)のため、また、信仰心をもって生活しようとする人は皆、不利を被る体制になっていたため、キリスト教信者は、ほんの２割しかいませんでした。この事実も見逃してはいけません。したがって、東ドイツの人々には、人生を意義あるものにしていく力としての宗教(Religion)が大きく欠如していたのであります。

1.3. ドイツの経済・社会改革(Wirtschafts- und Sozialreformen in Deutschland)

現在の危機(Krise)を乗り切るためにドイツは経済・社会改革を成し遂げなければなりません。おそらく皆様方、ご存じとは思いますが、ドイツ経済は再統一直後、信じられないほどの活況(Wirtschaftsboom)を呈し、翌年の91年まで景気はずっと上向きました。ちょうど、多くの国々で景気後退(Rezession)の兆候が現れ始めた時です。この活況は、東ドイツからの旺盛な消費需要(Konsumnachfrage)に端を発したものであります。その後、世界的な景気後退はドイツにも飛び火しました。ドイツ経済の指数(Parameter)はすべて悪い方向に推移しましたＧＮＰ(Bruttosozialprodukt)の落ち込み、膨大な財政赤字(Staatsverschuldung)、失業率(Arbeitslosigkeit)、インフレ率(Infrationsrate)の上昇であります。やがて、新連邦州では、経済活性化の兆候がはっきりと見られるようになりました。もっとも、東ドイツはこれから何年も、西からの年間１千億ドル(約11兆円)単位の膨大な資金移動(Transferleistungen)に頼らざるを得ないでしょう。ドイツ経済の将来を確固たるものにすべく真剣に取り組んでいかなければなりません。これまでは経済・金融政策の若干の修正で、社会市場経済体制をうまく機能させる事ができましたが、これだけでは駄目です。第二次世界大戦以降、ドイツは常に成長を続けてきました。世界の中でもドイツは最短の労働時間、最高の賃金、社会福祉の国になりました。この国際的に見てあまりにも上昇した人件費・社会保障費(Lohn- und Sozialkosten)のため、ドイツの産業には多くの分野で、もはや国際的競争力がありません。その結果、多くのドイツ製造業(Industriebetrib)

はその生産・研究拠点を外国に移転するようになりました。製造業の中でも、業種によっては、「リーン・プロダクション(Lean Production)」・フレックスタイム(die flexibleren Arbeitszeiten)・機械稼働時間(Maschinenlaufzeiten)の有効利用といった日本で始まった方法を採用するドイツ企業も出てくるようになりました。ドイツの名の通った企業でも労働者の大量解雇(massenhafte Entlassung)が実施されるに及んで、今や労働組合(Gewerkschaft)も、数年前以上に妥協の姿勢を見せつつあります。ダイムラー・ベンツ(Daimler-Benz)社は、最近、メルセデス(Mercedes)の小型車の生産をシュトゥットガルト(Stuttgart)近郊のラシュタット(Rastatt)で行うべきか、あるいは、外国で生産すべきかという段階になって、労働組合から賃金・労働時間に関する大幅な譲歩を勝ち取ることができました。経済投資先としてのドイツの地位を確保するという事についての議論が緒につきました。ドイツの競争力を保とうと思えば、たとえ時間がかかっても考え方を徐々に変えていかねばならないし、甘え切った習慣や過度の要求は諦めなければなりません。

ドイツ企業は現在懸命に経営・生産手法(Management- Produktionsmethode)を改革し、徹底的に荒療治を行う事で競争力回復に努めています。人員削減や経費節減だけでは不十分で、むしろドイツでは企業の徹底的リストラに取り組んでいるところであります。経済危機(Wirtschaftskrise)でかなりのショックを受けましたが、その後、旧来の闘争本能(Kampfgeist)に再び火が灯り、新たな希望が目に見えるようになりました。金属業界(Metallindustrie)における新規賃金協約(Tarifvertrag)は事実上ゼロ回答で終わりましたが、労働時間に関して柔軟になってきました。至る所で企業は全面的に構造転換していますし、旧来の職制(Hierarchie)は姿を消しました。官僚主義(Bürokratie)に凝り固まったコンツェルンは大幅に変貌を遂げ、新しい産業革命(industrielle Revolution)がドイツで進行中です。これはベルトコンベアーの導入と同様に非常に重要で、皆様方の国、日本やアメリカ合衆国(USA)を手本としたものであります。企業の革命(die Revolution der Unternehmen)はとりわけ次の点において見られます。

— 意志決定過程(Entscheidungshierarchie)について言えば、今や経営のスリム化(kleine Managementebenen)、担当幹部職の簡素化(flache Führungspyramiden)が目標とされています。

— 権限の委譲(Delegation von Entscheidungen)も進み、大半の意志決定は担当部門で下され、いかなる活動も自己責任(Eigenverantwortung)で行われる

ようになりました。

ー 仕事の分担(Arbeitsteilung)が明確になり、複数の部署からなるチームによって、職制を越えて処理されます。

ー 柔軟性(Flexibilität)も芽生えております。企業は例えば消費者の好み等、ありとあらゆる変化に対応するようになりました。「常に何かを学び続ける企業(das lernende Unternehmen)」、これが目標です。

ー 開発(Entwicklung)も消費者志向(kundenorientiert)となり、下請け(Zulieferer)も含め、関係する部署は最初から一緒に開発作業(Entwicklungsprozeß)に関与しています。

ー 改善(Verbesserung):仕事の流れのあらゆる局面に常時、全従業員が参画するようになりました。
(つまり、世界的に有名になった言葉「カイゼン(改善)」であります。)

ー 不必要な経費(Verschwendung)は順次、削減されています。

ー 在庫(Lagerhaltung)も減少。緊急に必要とされるものだけ配達、受注分だけ生産といったジャストインタイム(Just In Time)の観念が定着しております。

ー 品質管理(Qualität)についても生産過程全体を通じた永続的チェック体制(permanente Kontrolle)が整いました。
生産完了後初めて検査するという事はもうありません。

ー 労働時間(Arbeitszeit)は弾力的(flexibel)に運用され、極端な場合、グループ内で従業員が自ら出社退社時間を決めています。

もちろん、日本を見習って、将来性のある技術開発に的を絞った産業政策(Industriepolitik)を推進していく事も必要です。例えば、バーデン・ヴュルテンベルク(Baden-Württemberg)州は、「未来委員会・経済2000(Zukunftskommission Wirtschaft 2000)」を発足させました。この委員会ではドイツにとって新しい形の産業と国家の協力関係が模索されています。それによれば、

新しいハイテク産業(Hochtechnologie-Industrie)への投資が企業にとって可能で魅力的になるような精神環境や前提条件(Rahmenbedingung)を官民一体で作り出さねばなりません。ここでは、政府が将来の対話の音頭をとって、旗振り役を務めなければなりません。また、政府には、需要喚起のため、この未来技術の商品を率先して取り入れていくという役割が求められています。したがって、このバーデン・ヴュルテンベルク州未来委員会は連邦レベルで「新技術産業戦略会議(Strategierats für neue Technologien und Industrien)」を設立する事を呼びかけました。この戦略会議は世界の技術動向の大きな流れを分析して、ことのほか、重要な技術をリストアップする事になっています。この会議では、ドイツの研究開発の実力、極めて重要な技術に関するドイツ企業の国際競争力がどの程度のものか判定され、将来ドイツ経済がハイテク競争(Hochtechnologiewettbewerb)でどの分野を中心に進んでいくべきか定義づけられます。さらに、この戦略会議は、21世紀の経済・社会に向けて国家や企業が構造転換(Strukturwandel)するための対策に道を開く事となるでしょう。また、将来の構想や技術進歩についての人々の考え方を修正し、具体的な議論を高度社会、ハイテク経済といった長期的な将来の見通しに導くものであります。19世紀の工業化時代を本質的な基盤とする現在の経済を、21世紀の将来志向の先端技術に向かって変えていくための一歩が踏み出されなければなりません。まさに、この課題にドイツ経済は直面しているのであります。

1.4. ドイツの新しい国際的役割(Die neue internationale Rolle Deutschlands)

ここでドイツ連邦共和国の新しい国際的役割に目を向けてみましょう。再統一は単に内政上の新しい方向付け(Neuorientierung)を強いただけではありません。ヨーロッパ、世界におけるドイツの役割も、新たに定義づけられなければなりません。ドイツは大きくなりました。完全に主権は回復し、潜在的な豊かさも増しました。統一前、当時の西ドイツの人口は６千万、ほぼ日本の半分でした。統一後、約８千万人で日本の人口の３分の２になりました。これにより、欧州連合(Europäische Union)内部の政治・経済の均衡を新たにとっていかなければなりません。皆様よくご存じのごとく、ドイツ再統一は必ずしも世界の至る所で無条件に感動をもって迎えられたわけではありません。とりわけ西ヨーロッパの友好国には、憂鬱になった政治家も沢山いました。彼等はドイツが果たして統一後も、ずっと平和を望み、欧州統合(europäische Integration)に関心を払い続ける国であるだろうか、強大な経済力、政治力を悪用しないだろうかと自問したものであります。

その後はっきりしたのは、これから数十年は、世界で３つの主要経済圏(bedeutende Wirtschaftszentren)が動きを決めるという事であります。つまり、アメリカ(Amerika)、ヨーロッパ、アジア(Asien)です。ここで言うアメリカとは、合衆国だけでなく、ナフタ(NAFTA)、北米自由貿易圏の事で、アメリカ合衆国、カナダ(Kanada)、メキシコ(Mexico)を指します。この巨大自由貿易圏(riesige Freihandelszone)は、やがて中南米の国々をも傘下におさめるかもしれません。ナフタは３億7200万人の市場です。欧州連合は現在１２ヵ国、３億４千万人を抱えています。95年頃にはオーストリア(Österreich)、フィンランド(Finnland)、スウェーデン(Schweden)、ノルウェー(Norwegen)が欧州連合に加盟するでしょう。ひょっとすると、さらにポーランド(Polen)、チェコ(Tschechei)、スロバキア(Slowakei)、ハンガリー(Ungarn)が続くかもしれません。アジア経済圏には、３億3500万人のアセアン(ASEAN)諸国の他に、香港(Hong Kong)、台湾(Taiwan)、韓国(Korea)、日本、そして目を覚ましてきた大国、中国(China)が含まれます。ベトナム(Vietnam)もこの経済圏に入るでしょう。この３つの経済圏の中で、今やアジアが最も高い成長率(Wachstumsrate)を誇っており、この急激な成長はここしばらく続くものと思われます。日本は主要工業国(führendes Industrieland)としてのアジア経済圏の中心となっています。

このような将来展望からして、ヨーロッパには、実際のところ、経済政治統合をさらに推進する以外、選択の余地はありません。

ドイツの将来は欧州連合(Europäische Union)にかかっています。したがって、我々は最も緊密な友好国でパートナーであるフランス(Frankreich)とともに、これからも欧州連合の原動力となるでしょう。ヨーロッパにしっかりと結びつく事によってしか、ドイツは内なる安定(Stabilität)と近隣諸国との均衡(Gleichgewicht)は保てません。経済上、論理的に考えても、行きつく所は、経済通貨同盟(Wirtschafts- und Währungsunion)となる欧州連合です。ヨーロッパにおける我々の経済的指導力は、近隣諸国との協調があってこそ発揮できるのであります。欧州連合がそうであるように、ドイツはすでに近隣諸国と極めて緊密に関わっていますし、したがって、相互依存関係、相互監視体制の中にしっかりと組み込まれています。いかなる障害があろうとも、ドイツはこれからもマーストリヒト条約(Vertrag von Maastricht)に記された統合(Integration)の道を歩んでいくでしょう。我々はより緊密に一体化しながら成長す

る、外に開かれたヨーロッパに、政治的、経済的な重点を置くでしょう。このヨーロッパは、さらに東に拡大するかもしれません。

我々の外交政策(Außenpolitik)にとって、もう一つ大切なことは、東ヨーロッパにおける経済の発展と政治の安定(politische Stabilisierung)であります。わが国の中欧・東欧諸国(mittel- und osteuropäische Staaten)との関係には、政治的な障害(Belastung)は本質的にはありません。二国間、また、欧州連合(Europäische Union)の枠内で経済関係(Wirtschaftsbeziehung)を整備してゆくことが大切です。皆様ご存じかもしれませんが、現在ドイツは、東欧諸国に対する最大の債権国(Kreditgeber)であります。何といっても、将来への投資(Investion)をしているわけです。強力なパートナーを東ヨーロッパに持つのが我々の願いであります。特に重要なのが、緊密そして長期的なロシア(Rußland)との提携関係(Partnerschaft)を発展させることであります。ロシアはこれからも世界政治の中で大きな力を持つ国であり続けるでしょう。豊富な天然資源(Rohstoffvorkommen)に恵まれており、経済上のパートナーとしての潜在力(Potential)には相当なものがあります。こういった意味で、この大国ロシアの政治の安定と経済の発展は我々の最大の関心の的であり、我々は、エリツィン(Jelzin)大統領の改革路線(Reformkurs)を支持しています。したがって、東京サミット(Weltwirtschaftsgipfel in Tokyo)で日本が責任の一端を担うべく表明してくれたことに対して歓迎の意を表するものであります。

もう一つの外交上の優先課題(Priorität)は国連(VN:die Vereinten Nationen)への協力です。すでにドイツは、兵力(Streitkräfte)を国連の人道的(humanitär)活動に投入しています。例えば、カンボジア(Kambodscha)の野戦病院やサラエボ(Sarajevo)向け空輸に動員していますし、ソマリア(Somalia)向け兵力派遣についても責任を分担しております。湾岸戦争(Golfkrieg)におけるクウェート(Kuweit)解放のための国連活動(VN-Aktion)への膨大な資金援助(finanzielle Unterstützung)も忘れてはいけません。

我々の憲法(Verfassung)では，北大西洋条約機構(NATO)域外での国防軍(Bundeswehr)の軍事活動(Kampfeinsätze)が禁じられています。これまで連邦議会(Bundestag)では、国防軍の軍事活動地域を拡大するための憲法改正に対して、過半数が獲得できていないのが実情です。国民(Bevölkerung)もこの問題についてはむしろ消極的です。

国連(VN)の増大する役割については、日本でも安全保障理事会(SR: Sicherheitsrat)の拡大に関して多くの考えが巡らされました。我々は、安保理の常任理事国入りを目指す日本を支援します。コール首相(Bundeskanzler Kohl)は昨年の２月に訪日した際に、この点確認しています。もし安保理で常任理事国枠が新たに追加されれば、ドイツも参加するつもりであります。

もう一つの新たなドイツ外交政策の優先課題は、日本、並びにアジアのハイテク立国・新興国(Hochtechnologie- und Wachstumsstaaten)になお一層強力に目を向けることであります。この地域は世界の中でも将来的に最も重要な役割を果たすでしょう。アジア太平洋圏(asiatisch-pazifischer Raum)にもっと入り込んで、これらの国々との政治・経済・文化交流を深めるのが我々の狙いとすることであります。これから、特に日本について少し詳しく述べてゆきたく思います。

2）変貌する世界の展望の中での日独関係(Die Deutsch-Japanischen Beziehungen im Lichte der veränderten globalen Perspektive)

2.1. 日独の類似歴史体験(Ähnliche geschichtliche Erfahrungen Japans und Deutschlands)

歴史に目を向けてみると、過去150年のドイツと日本の動きには妙に似通った点が見られます。日本もドイツも19世紀の後半に決定的な歴史的変化を遂げました。日本は、明治維新(Meiji-Restauration)で数世紀続いた鎖国(Abschließung)に終わりを告げ、西洋の科学、技術、文明に門戸を開き、これによって、工業国の仲間入りを劇的に果たしました。これとほぼ時期を一にして、ドイツでは、数百年にわたって繰り返し行われた政治的な分裂(Zersplitterung)に別れを告げ、ドイツ帝国(Kaiserreich)の誕生を見ました。政治的統一とそれに続く急激な工業化(Industrialisierung)によって、ドイツはヨーロッパの一大勢力になりました。このドイツの経済的、並びに政治的発展は第一次世界大戦で幕を閉じたのであります。

日本とドイツは30年代には国家拡張策をとり、その結果、第二次世界大戦が勃発、ついには1945年に敗戦となります。困難な条件下にあって、日独両国は戦争で破壊した産業を再復興させ、世界が驚く経済の奇跡(Wirtschaftswunder)を起し、常に成長を続けてきました。今、両国は経済危機に襲われ成長が止まりまし

た。両国ではちょうど、改革の緒についたところです。日本では、政治改革(Politische Reform)と経済のリストラ(Umstrukturierung)が計画されています。ドイツは戦後最悪の景気後退(Rezession)を味わい、その経済への影響は再統一に際しての莫大な費用により増幅されています。そのため、経済・社会の構造改革(strukturelle Wirtschafts- und Sozialreform)が求められるようになりました。両国では政治・経済危機(Krise)のより深い理由について考察されるようにもなりました。日独が迎えている危機には、非常に似通った理由があると私は思います。急激な経済成長(Aufschwung)が何年も続いた結果、これからも常に成長するという浅はかな信仰に陥ってしまったのです。冷静沈着な経済政策に対する認識や基本的な人徳(menschliche Tugenden)というものはどこかに行ってしまいました。それに代わって、単なる希望的観測(Wunschdenken)、飽くなき利潤追求(Gewinnstreben)、そして特定の集団の利益に血眼になる姿勢が事態を決定づけてしまいました。経済危機は、統計があれば常に認識できますし説明がつくわけです。しかし経済危機の本当の理由はいつももっと深い所にあるのです。つまり、人間のモラル(Moral)であります。したがって、危機を乗り切るには、純粋な経済政策上の対策にとどまらず、経済運営決定に直接たずさわる人達すべての考え方とモラルを変えることが不可欠です。現在我々両国は、じっくり考え、自己批判(Selbstkritik)もし、考えを改め、そして改革すべき時を迎えています。もし自主的にこの権利と義務を行使しなければ、必然的に危機がそれを強いることとなります。この経験を日独両国は今しているのであります。

2.2. 経済・技術・研究分野での提携強化の可能性(Möglichkeiten einer stärkeren Zusammenarbeit auf den Gebieten der Wirtschaft, der Technologie und der Forschung)

世界は一つの村(Dorf)になりました。経済的に、また技術的に見て、これはガット(GATT)が制裁を下す世界自由貿易秩序(liberale Welthandelsordnung)の中で、一つの国の動きがその他すべての国の動きに波及することを意味しています。日独間には、すでに何年も前から、学術関係において実りある対話があり、また緊密なネットワークもあります。この提携関係(Zusammenarbeit)は、研究開発事業(Forschungs- und Entwicklungsprojekt)を共に推進することによって強化されねばなりません。コール首相が前回来日した時に、先端技術・環境問題共同協力会議 (Kooperationsrat für Hochtechnologie und Umwelt) の設立を提案しました。この会議の使命は、学術・経済提携の強化を目指して、技術のトレンドを

お互いに分析し、共同戦略をとってゆくことにあります。新しい技術の研究開発にかかる莫大なコストを分担するという点で両者の利害は一致しています。特に、将来的に益々重要性を帯びる環境分野(Gebiet des Umveltschutzes)で数多くの提携の可能性があります。

2.3. 文化交流強化の必要性(Notwendigkeit eines verstärkten Kulturaustausches)

ヨーロッパ、並びにドイツでは、自分達とは異なる、一般的にアジア、特に日本の文化についての理解が今でも不足しています。連邦議会(Bundestag)、コール首相、キンケル外相(Außenminister Kinkel)は、我々のアジア政策(Asienpolitik)を成功に導くためには、アジア文化にもっと深い理解を示すべきだと強調しております。私は学生だった40年前から、西洋はアジアから学ばねばならないという確信を持っています。世界は、今や非常に小さなものになりました。それに伴い、各民族の特別な文化財は、他のどの民族も手にすることができるようになりました。日本は西洋の科学技術を取り入れることで、西側先進国と同様、大きな物質的進歩を遂げました。ただ、西洋の科学技術は人間の生活に深い意味付けを行うということに関しては、あまり貢献しませんでした。この人間の生活の意味付けという点では、東洋の伝統文化、特にヒンズー教(Hinduismus)、仏教(Buddhismus)、道教(Taoismus)、儒教(Konfuzianismus)、といった宗教(Religion)に軍配があがります。19世紀、また今世紀には、アジア哲学の重要な教典がヨーロッパの言語に翻訳されました。今世紀、とりわけ第二次世界大戦後、西洋ではアジア文化への関心が高まりました。また、ヒンズー教、ヨガ(Joga)、道教、(イスラムの)スーフィズム(Sufismus)や禅(Zen)についての書物の需要も増大しました。ドイツでは、現在、5万人の人が座禅(Za-Zen)を組んでいると推定されています。

イギリスの哲学者バートランド・ラッセル(Bertrand Russel)は1946年に西洋哲学の歴史について、著書の中で以下の如く述べています。「我々がこの世で幸せを感じようと思えば、我々は、政治だけでなく文化について考える時にも、アジアに同じ権利(Recht)を与えなければならないと思う。これがどのような変化をもたらすか知らないが、その変化は極めて大きく、また、非常に大切なものになると信じている。」と彼は述べています。西洋文明(westliche Zivilisation)の強さの基礎は、生活をするにあたっての物質的な問題を克服するために、一局集中的に力を注いできた点にあります。これに対して、アジアの強みはずっと以前から、内省(Introspektion)、つまり自己を見つめ、分析するということにあり

ました。個人、並びに社会の健全さの前提となるのは、一方では、世界制覇に向けた人間的な欲求、もう一方では、内省と自己実現(Selbstverwirklichung)、この二つがバランスをとりながら発展してゆくことであります。したがって、西洋文化と東洋文化はお互いに補い合う理想的な補完関係にあります。我々は西洋において魂(Seele)を発見するために、東洋からのこの内省を学び、自分達の文化に取り込んでゆかねばなりません。

日本は、禅仏教、武道(Kampfsportarten)、そして様々な芸術という形で、多くの文化財を生み出してきました。これは、我々をこれからも救ってくれるものであります。このような文化について、もっと知ろうと思っている人がドイツには何千人といます。ほんの一例ではありますが、仏教の哲学者、道元、弘法大師、白隠は日本だけのもではありません。世界のすべてのものであります。我々は、ドイツで、日本の禅師(Zen-Meister)が本来の禅の姿(authentisches Zen)、また、禅文化を教えてくれる機関や養成所を必要としています。禅というものは書物からではなく、修行(Übung)によってのみ体得できるものですから、経験豊富な禅の先生から直接、指導監督を受けることがどうしても必要であります。座禅を伝えることは、単なる学術・知的文化交流(Austausch)とは少し趣が異なります。
私の大阪・神戸総領事としての任期はこれから４年ですが、ドイツに禅養成センター(Zen-Bildungszentrum)が設立できるように、力を尽くしたく思っています。

日本側にもドイツとの提携関係強化の用意があることを私は承知しております。これは、政界、文化界の代表者と会談を何回も持つ中で、はっきりとしてきました。この意味において日独協会(japanisch-deutsche Gesellschaft)の果たす役割には重要なものがあります。個人レベルの出会い(persönliche Begegnung)なくして国民の間の理解(Verständigung)は生まれません。この場をお借りして、皆様のドイツへの興味、また、ドイツ人との出会いに抱いておられる関心に対して感謝申し上げます。この関心があってこそ日独関係の強化が成し遂げられるのであります。孔子(Konfuzius)が述べたと言われる素晴らしい言葉をもって、この講演を締めくくりたく思います。どうすれば世界に平和をもたらすことができるのか、という問いに孔子は次のように答えました。

子曰く、「心正しければ、徳美し、徳美しければ、家整い、家整えば、国治まり、国治まれば、世安らぐ。」

つまり、自分を磨いて正しい人間になれば、社会に秩序(Ordnung)、世界に平和が訪れるということであります。

♦ これは総領事館より送付された原稿をもとに作成したものです。
(ドイツ語は)事務局で挿入しました。[文責:羽白]

[ニルス・グルーベル(Dr. Nils Grueber)] ドイツ総領事 略歴

1933年7月3日 シュベービッシュ・グミュント生れ
1953 - 58 エアランゲン、フライブルク及びボン大学にて法学・政治学履修
1960 - 62 チューリッヒ大学及びC. G. ユンク研究所(スイス)にて哲学、法倫理学、社会学、心理学履修 卒論:法哲学、法学にて博士号取得
1963 第二次国家試験合格(法学、シュトゥットガルトにて)
1964 事務弁護士
1965 ドイツ連邦共和国外務省入省
1965 - 66 アルジェ(アルジェリア)及びラバト(モロッコ王国)大使館
1967 - 68 日本語履修
1968 - 70 東京大使館(経済・文化部)
1971 - 73 クリーブランド(アメリカ合衆国オハイオ州)総領事館副総領事
1973 - 76 本省勤務(文化部)
1976 - 79 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館副総領事
1979 - 82 カイロ(エジプト)大使館(文化部長)
1982 - 86 ユネスコ代表部(パリ)出向(次席代表)
1986 - 89 本省勤務(政治部国連デスク部長代理)
1989年10月- ジャマイカ、ベリーズ及びバハマ国大使
1993年5月 兼カイマーン諸島、タークス・カイコース諸島総領事
1993年10月 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事

既婚、子供3人 趣味:テニス、読書、ピアノ(クラシック)、絵画、分析心理学、東洋哲学

◎ 以上、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館より送付の資料

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

※ ドイツからの便り ※

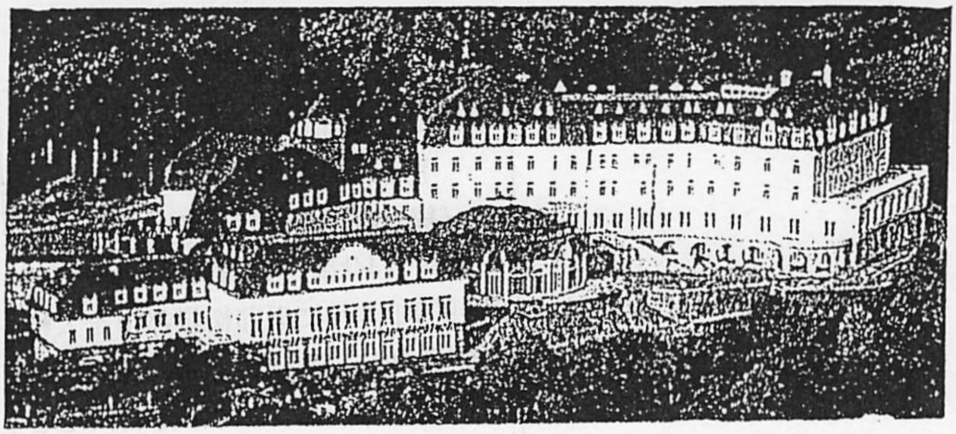
※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

森の中の迎賓館ペータースベルク

Schmidt YOKO UEDA
(植田 陽子)

ライン河をゆっくりと船遊びをしながらマイン川からボン近くに下って来ると、゛七つの丘゛と呼ばれる山々の峰がみえて来ます。その１つペータースベルクの山頂にドイツ連邦共和国の迎賓館が典雅な姿を見せています。麓から山頂までは森又森…すでに紀元前４世紀頃から人が住んでいた跡や、ゲルマンやケルトの史跡が残っていて自然公園にも指定されています。

ライン河対岸にはボンの町が広がり、そのボンのどの町角からもみえる山頂の迎賓館の上に丁度一年と少し前日の丸の旗がはためきました。天皇・皇后両陛下がご滞在になったのです。両陛下がヘリコプターに挑戦され、初めて乗ってごらんになったのもこの山頂からでした。



ここに前身のホテルがオープンしたのは１８９２年。その後第一次世界大戦、黄金の３０年代を経て、第二次大戦、戦後と、ボンがドイツの首都として歩んだ歴史と同様、ホテルも歴史の一部を担ってきました。１９５２年までは連合軍最高司令部が置かれドイツの戦後処理がここで協議、決定されました。１９４９年１１月当時のアディウアー首相がサインしたペータースベルク協定は、戦後ドイツが主権国家として歩む重要な第一歩となりました。

１９５５年から６９年までは国賓用のホテルとして、英国のエリザベス女王を始め各国の国賓を迎え、１９７３年のソ連のブレジネフ書記長の訪問を最後に１９３８年個人所有であった当ホテルを政府が買い取り大がかりな増改築の後、１９９０年秋、ドイツ政府の正式な迎賓館として開館。新しい迎賓館の最初の国賓はゴルバチョフ書記長一行でした。

その後東西ドイツの統一、東欧の自由化など新しいドイツ史、そしてヨーロッパ史が始まりました。迎賓館にもエリツィン大統領、クリントン大統領など全世界からの国賓の訪問が続いています。

一般のホテル部門も併設され、第一級国賓の訪問以外の時にも一般に利用出来るというケースは迎賓館として、世界でも初めての試みでしょう。

（植田陽子氏は、ボン迎賓館ペータースベルクの政府側総支配人夫人です。）

ボン（Ｂｏｎｎ）

ドイツ連邦共和国の前首都。

（統一後の首都はベルリン。）

面積 144㎢、人口約30万人余。

1969年８月に近郊衛星都市を大幅に合併し、人口は２倍強増加した。

同国西部、ライン川が片岩山地を離れてケルン低地に出る付近の左岸に位置する。

ベートーヴェンの生家があることなどで知られている。

ボン独日協会との姉妹協会提携調印式を終えて

中村　敏子

関西国際空港までボンからの一行を迎えに出たはずのペーター・ヒンメルシュタインさんが、あわてゝ家にやってきた。ドイツの出発空港が霧でてまどり急遽バンコク経由南まわりに変更、到着は１０月１４日夜おそくになるという。
ひっきりなしに入る航空会社からの連絡を受けながら、彼らの希望にそったホテルの手配をすませると、今度は３０時間という長旅に、彼らの年令が気になりだした。
ボン独日協会々長ヴォルフガング・ディーツ　７３才（勲一等受章・悠々自適のひま人）はじめ、６０才前後の４人が一日おくれで高松駅に着いた時、この不安はふっとんだ。
ホームでは、例のはじけるような笑い声がわきおこり、再会を喜びあい、去年の出合いが、又よみ返ってきた。香川とボンの姉妹提携正式調印のためはるばる、あのボンからよくいらして下さった（バンコクでトランク一個つみのこしというおまけつきで）。
提携の目的でもあるホームスティを自ら体験したいので、家庭のメンバーとして扱ってほしいとの申し出が前もってあり、それにそうようにと準備した。今度は、全員一緒に動く機会が多いので私宅とごく近い多田佳代さん（大変よくお世話下さり全員感激）宅に分宿した。昼となく夜となく両家を行き来して４日間はまたたく間にすぎた。

私は、彼らとはボンで２回会っていた。理事会にも出席して侃々諤々の場面もみてきている。私のボン市長表敬訪問に彼らは大変こまやかな配慮をしてくれた。在ドイツ日本大使館の松本和朗公使がわざわざ出迎えて下さり、中華料理をごちそうになったのもこの時だった。「相互主義のもと、時間をかけて」と公使は諭され、今回も着任して間もない有馬龍夫大使（９月８日に着任）のメッセージを手配下さった。

たしかに、この姉妹縁組は２年前の冬、私が、デュッセルドルフの近郊・ノイスからかけたたった一本の電話がきっかけとなった。しかし、これを受けとめて下さったメンヒェ夫人の大らかな人柄と心づかい、そして積極的にことにあたる姿勢とが大きな鍵であったと思う。

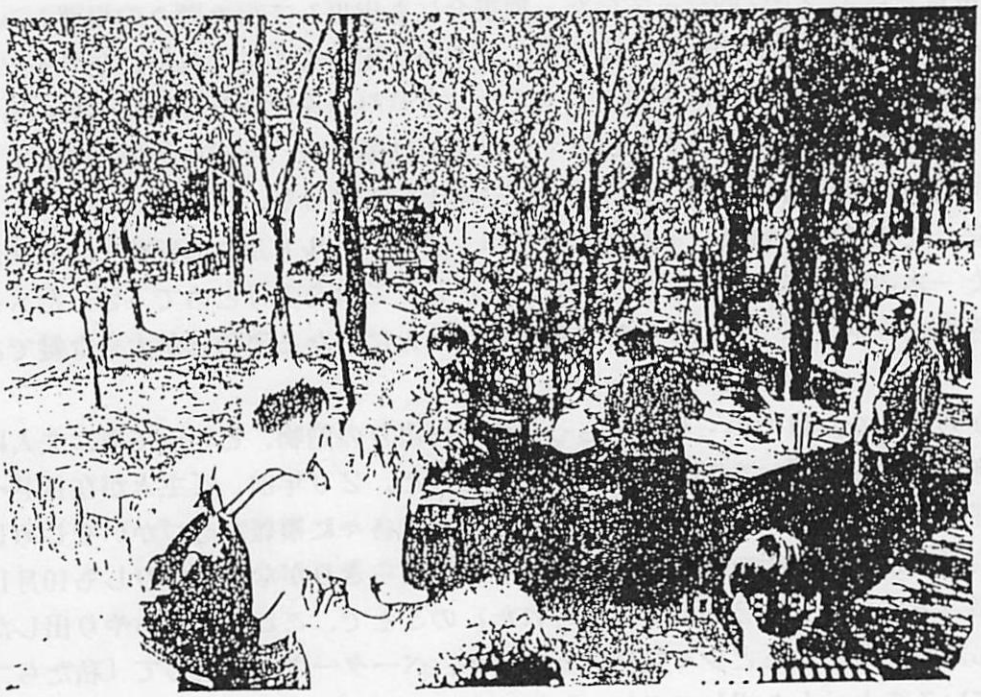
遠い国から時間をかけていらして下さったのが何よりの贈物、といっても、夫人は、終始「おみあげ、おみあげ」を呪文のようにくり返した。２０年前、ご主人が在日ドイツ大使館へ赴任していた頃のことを思い出したかのように各々に複雑な心づかいをしめした。
ディーツ会長とは、好敵手で机をたたいて論じだしたらきりがない。おりしも10月15日投票の総選挙（ドイツ統一後２回目で注目された）のことで、ここ高松でもやり出した。
私が知らんふりをしていると少々気になったのか、ペーターさんを通じて「私たち二人をどう思っているのか」とたずねてきた。「以前から知っているから何ともない。」と、私。
爆笑がおこる。こんなくり返しである。

１０月１７日姉妹協会提携は成立した。肩ひじはらず、ありのまゝの姿で交るのがよいと思う。ドイツ語の習得も一つの課題であるが、ことばが充分でなくても、相手の人となりは、充分理解できるものである。おそれることはない。当面の目標として、相互のホームスティ・情報の交換があげられるが、双方の協会が、智恵を出しあい協力すればきっといゝ方向にむかうだろう。

ボン一行は、疲れもみせず秋晴れのさぬき路を満喫し、一組は、レンタカーで四国一周と高野山もうで、一組は、京都の秋をと各々に出発した。このように香川を訪れるドイツ人たちに一番印象深かったことはと聞くと、一様に金刀比羅宮の神秘性とおごそかさだと口をそろえて神妙に答える。そしてKKタダノ・志度工場の見学で、彼らはあらためて日本企業の合理性と活力のもとを目のあたりに見たと思う。特にディーツ会長は、その夜、こんなにドイツとかゝわりのある会社とは知らなかった。詳細な資料が是非ほしいと熱心にといかけた。

中央公園の片すみに小さな記念植樹をした。「冬のまつり」に役立つのはいつのことだろうか。今は、小さい樅の木だが、やがて丈がのび　枝がはり　あの濃いみどりの葉もしっかりと繁り立派なタンネンバウムに育ってくれると思う。

今度の旅を誰よりも待ち望み楽しみにしながら、直前に急逝されたヒンメルシュタインさんのお父上も見守って下さると思うので。



私とドイツ語との関り

福　家　　隆

香川日仏協会には結成時より参加しておりましたが、その後香川日独協会ができたのを知り、細川会長のすすめで入会いたしました。

私とドイツ語との関りは、大学の教養課程でドイツ語を初めて学んだ時にさかのぼります。教科書にアルバート・シュバイツアーの「文化の人種的基礎特質」、マルチン・ルッターの「キリスト者の自由」、パウル・エールリッヒの「生命と活動」、ヘルマン・ヘッセの「思想の葉」、「アンネ・フランクの日記」、フリードリッヒ・グンドルフの「ゲーテ・対話録」があり、原文でドイツ語を学んだことがなつかしく思い出されます。また岡山大学教養部にヴーテノウ先生という若いドイツ人教師が赴任しており、その先生から主として発音、会話を教わりました。クラスメート数人で官舎にお邪魔して辞書を引きながら会話し、お茶をご馳走になったことも憶えています。

その後卒業して医師となりましたが、カルテ用語はまだドイツ語全盛でした。しかし次第にアメリカ医学が全盛となり、この頃の若いドクターのカルテ用語は英語となりましたが、私は未だ症状、所見等はドイツ語を使っております。（その方が日本語、英語より速く書けるからです。）

学生時代には親友に映画好きの医学生がいて「菩提樹」、「朝な夕なに」、「未完成交響曲」等の映画を一緒に見に行きましたが、あまり多くありません。その後はハリウッド映画、フランス映画が全盛になったように思います。

１９７８年に第１７回国際血液会議がパリで催され参加しました。この時フランス語が全然わからなくて困りました。その後ウィーンへ寄りましたが、数詞や通りの表示がわかりほっとしました。しかしドイツには寄らなかったのを、未だに残念に思っております。今年６月５日鳴門フェスタで第一次世界大戦のドイツ人捕虜収容所だった鳴門市のドイツ館を訪問し、久し振りにドイツの香をかいだ思いがしました。

先日日独協会総会に出席させていただき、グルーベル神戸総領事の講演を拝聴し、世界の歴史、政治、経済、文化の各分野における過去から現代までの的確な分析、認識と未来への指針（国家間から個人のレベルまで）を示していただき深い感銘を受けました。それとともに永らく忘れていたドイツ語の響きが、私の青春時代を思い出させて、あっという間に過ぎた私の人生を振りかえる契機となりました。また近くまで行って訪れることのできなかったドイツへの憧れがますます強くなりました。次の海外旅行はぜひドイツにしたいと思っております。会員の皆様から情報をお教えいただければ幸いです。

ドイツの小さな島での思い出

Insel Mainau

8月21日（日）（現地日）の思い出より－

8月21日。朝スイスのビンタートウール市（チューリッヒの東北の位置）をバスで出発し、国境を通過したのち、昼頃ボーデン湖に浮かぶ〝自然を生かしたリゾート島マイナウ〟に到着しました。するとまず、おどろかされたのは、島の入口にあたる森の中の駐車場には何とヨーロッパ中からの車のナンバーでいっぱいだった。そして島への通行料を支払って橋を渡って行くと、左右にヨットや鳥、魚たちがいっぱい。そして橋を渡り終え島に入ると、木、花も世界の植物がいっぱい。その花や木が集まり大きなネコやふくろうに形成されているではないか!!〝何と言う美しさ（芸術的な）〟でとてもすばらしい。思わず写真をうつしたりみとれたりで…そんな　こんなところで昼をすぎていたので、食事のレストランについたのは1時半か2時頃だった。私は日本国内でテーマパークや村おこし町おこしの為に作ったリゾート地と比べて何と言うロマンのある〝自然な国際交流の場〟を提供してくれているのではないかと思った。

日本と同じ敗戦国として、また東西ベルリンの壁と言う暗くつらい年月をわずらったドイツだが自然を愛し続ける思いには感動せずにはいられなかった。そして私は昨年の世界陸上のマラソンコースになったシュツットガルトを思い出しました。その小さな（50万人余りで岡山市より少しの人口）町でマラソンランナーを先導するマラソンカーは排気を考えて電気自動車を使用していたのでした。また『地球の環境と地域おこし』について私も、今〝やさしさとゆとりが結ぶ都市農村ネットワーキング協会（略してURネット協会、会長：丸谷金保）〟にて勉強中（参考：村山首相も会員）です。そして先ごろも自社で太陽熱を生かしたソーラハイツを完成させました。このことは『自然を生かしたい』イコール国際交流の上に立っての平和に結びつくのではないかと思います。そしてこの島での一日は人が自然と共に生きることの大切さを知ることができました。

［この旅を計画してくれましたブレニマン夫妻（香川日独協会員）に感謝いたしております。今後共、国際交流をよろしくお願いします。］また私どもの作品が来年（1995）の2月18日から22日までドイツのフランクフルト（将来のヨーロッパ統合の事務所が出来るところ）で開催されます国際見本市で「フランクフルト、メッセ、アンビエンルテ’95」に日本国ブースにて、出品（香川県で2社）することが決まっていまして準備中です。尚、会員の皆様やお知り合いの方でご関心のおありの方は、　私ども（0877-28-5192）又は香川県企業振興課（0878-31-1111、内線2522）まで、お問い合わせいただければお知らせいたします。

（9月11日記）

丸亀市　笠井　強　より

異国でエレベーターに閉じこめられる

中村　勇

昭和５８年（１９８３）、東欧旅行の折り、ロンドン経由、ウイーン、プラハを経てバスでドレスデンへ向かう途中の国境付近は風雨で寒々としており、厳重なる検問所を通過するのには１時間以上かかりました。やっとドレスデンへ到着し、市内観光をする為にホテルの８階へ荷物を置いて、男性２名と女性６名とが定員１０数名のエレベーターに乗りました。ところがドアが三分の一ぐらい閉まりかけたとき、６０才半ばのウッカリ夫人がハンドバッグを室内に忘れてきたと慌てておりました。知らん顔をしていても良かったのですが親切心を出して直ちに öffnen と彫ってある朱色の楕円形のボタン（その他のボタンは全部黒色で円形）を押したのにも拘らず、ドアは閉鎖、下降して８階と７階との中間で止まってしまいました。ただ電燈は点いておりました。

すると初老の男が詰め寄って来て大声で「この赤いボタンを押したから止まったのだ」と真っ赤な顔をして叫ぶので「今から何時間止まっているか分らぬのに、そんな大きな声を出すと酸欠が起って全員が死んでしまう」と諌めると今度は真っ青になって最後まで沈黙しておりました。善意に解釈すれば彼は öffnen を英語の off と勘違いして、電源でも切ったと早合点したのかも分かりません？

また暫らくすると、今度は水泳の選手であったと自称する中年の女性が「お医者様でいらっしゃるそうですから（近頃、このような丁寧な言葉を聞くことはきわめて稀）ドイツ語で早くフロントへ連絡をお願いします」と懇願しに来ました。幸いにも？同行者の中にドイツ語を解する人は誰もおらぬので全く気楽な気持ちで備付の電話でフロントへ通知しました。フロント嬢は傍の男性職員と何か相談しているらしい声は聞こえますが、こちらへの返答は bitte, Einen Moment のみでしたが、同行者を少しでも安心させる為に「修理中ですから暫らくお待ち下さい」という応答であったと伝えておきました。

〔このような場合、電燈が点き電話が通じることは大変有難いことでした〕

しかし２０分経っても３０分経っても一向に動かないので一行は苛立ち、何回も電話をかけさされましたが返答は bitte, Einen Moment の一点張りでした。

エレベーター内の換気は悪く、蒸し暑く（schwül）なるにつれて呼吸困難や頭痛を訴える人が増え、Panik 寸前のような気がしてきましたが如何ともすることが出来ず、ただ頻々と電話をかけるだけでした。しかし１０数分（最初から５０分）後には何の通報もなく静かに下降して地上１階に止まりドアも自動的に開き、一同はホッとして外へ出ました。しかし驚いたことには数分前までは電話の応答をしていたホテル嬢を始めホテルの関係者は誰一人姿を見せておりませんでした。後日、帰国後に聞いたところによると、客に不完全なる物件（ここでは、このエレベーターを指す）を提供したので賠償問題が起こった場合を考慮したからであろうとのことでした。

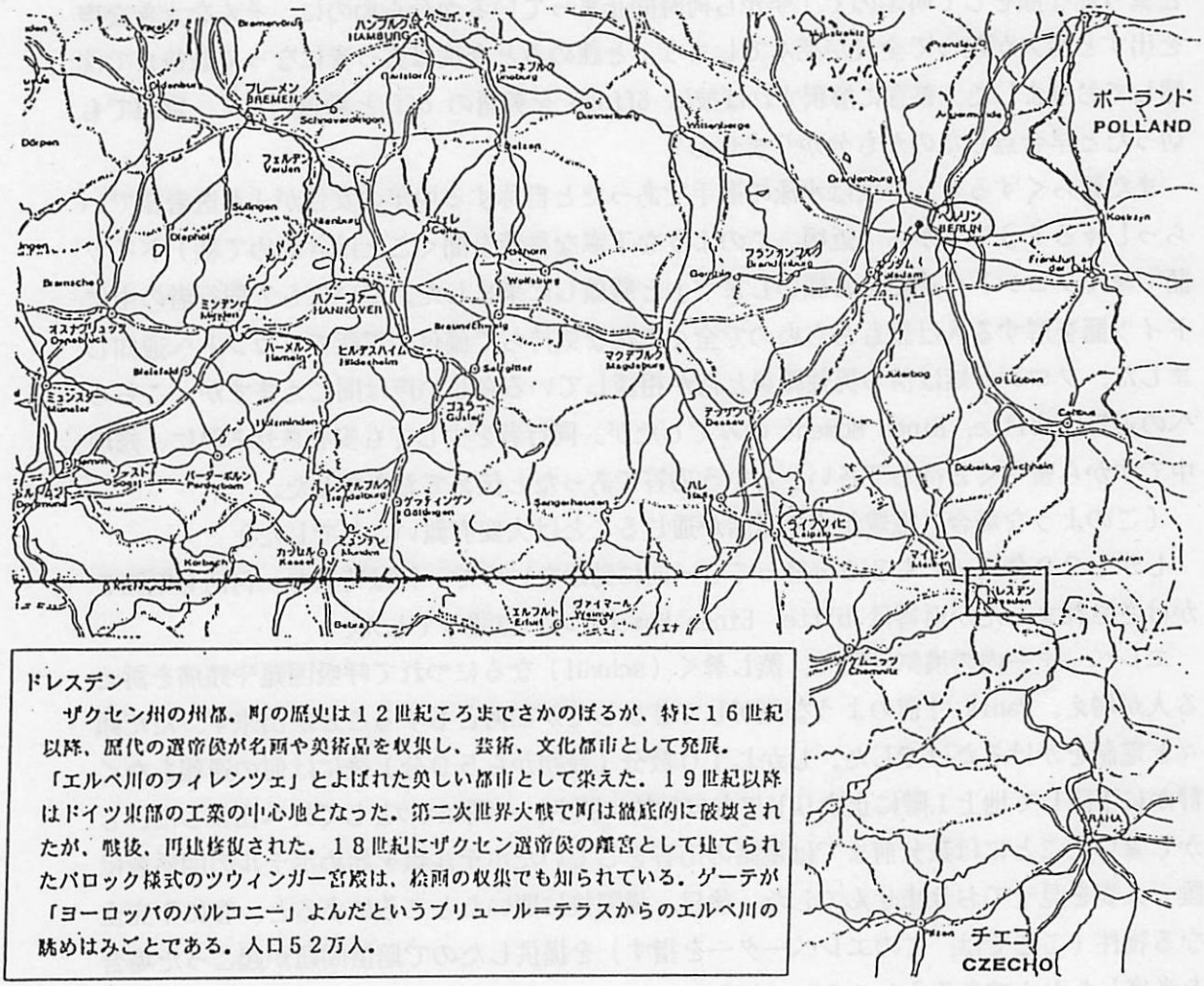
一行は不愉快なることは忘れることにして直ちにエルベ河の流れるドレスデン市内をバ

スで巡り、復興の遅れている猛爆の跡などを観ました。

翌日はライプチッヒで鹿島が最近建設せる Merkur ホテルに宿泊、エレベーターは三菱製でしたので安心して öffnen のボタンを押しました。

エレベーター〔éliveitə〕という言葉は米国や日本で用いられ、英国では Lift が使用されております。西ドイツでは Aufzug と Fahrstuhl が標示され、東ドイツでは Steigzeug と Lift が併記されておりました。しかし何れも上昇するという意味ばかりで、下降するという意味は含まれておりません。その点、日本の昇降機はまことに良く出来た語句です。しかし日常何気なく使用している「エレベーターに乗って下へ降りる」とは妙な誤れる語句ということになります。〔終〕 H6, 9, 25.

【ドレスデン】



ドレスデン

ザクセン州の州都。町の歴史は１２世紀ころまでさかのぼるが、特に１６世紀以降、歴代の選帝侯が名画や美術品を収集し、芸術、文化都市として発展。「エルベ川のフィレンツェ」とよばれた美しい都市として栄えた。１９世紀以降はドイツ東部の工業の中心地となった。第二次世界大戦で町は徹底的に破壊されたが、戦後、再建修復された。１８世紀にザクセン選帝侯の離宮として建てられたバロック様式のツウィンガー宮殿は、絵画の収集でも知られている。ゲーテが「ヨーロッパのバルコニー」よんだというブリュール＝テラスからのエルベ川の眺めはみごとである。人口５２万人。

ドイツ滞在の頃

中川　益夫

西日本フンボルト会の会員名簿によると、香川にはアレクサンダー・フォン・フンボルト（ＡｖＦ）奨学生が５名程みえる。私の場合は、正確に言うとＡｖＦ旅費奨学生として１９７４年４月から１年半ミュンヘン工科大学（ＴＵＭ）に留学させていただいた。

滞在期間中は、ＡｖＦ本部のあるボンにはもちろん、３週間に亘るドイツ一周旅行にも参加のチャンスを与えていただいたので、ＴＵＭのスタッフから「われわれドイツ人よりドイツ国内をよく回ってきたね」と羨ましがられた。

ＡｖＦ財団の精神は、世界各地から若手研究者を招いて協同研究の成果を上げることと同時に、世界にドイツの風物歴史文化を見聞していただくことにもあると聞いて驚いた。いま振り返っても、その驚きと感動は弱まっていない。

最初の３カ月は、英語で研究実験するつもりの人でも、希望すればドイツ語の勉強が出来たし、その期間中はめいめいの滞在地近辺への日帰り・一泊等小旅行に最適の期間だった。金曜日夕方から土、日へかけて列車や自動車でスイスやオーストリィへ出掛けることは簡単に出来たし、ドイツ各地を探訪することも楽しかった。

ミュンヘンからニュルンベルクへのアウトバーンは途中の高度差（大きな坂道）が大好きだったし、家族で旅行したチロル地方の山山の眺めは、教科書に出ていた作家横光利一の『チロルの秋』の描写を彷彿させて、二重の喜びを味わうことができた。

ミュンヘン郊外の城や湖には、日本からのお客がある度に同行案内した。リンダウやオーバーアマガウなどでの「空気の輝き」（屈折率が通常より高いように思われる）も印象深いし、ミュンヘンの「芸術家の家」や広大な敷地の英国式庭園、ドイツ博物館、アルテピナコテークなどにはそれぞれ数回、オクトーバーフェストには研究室あげて出掛けたことが思い出される。

私は原子力基礎研究の分野が専門。ドイツの研究用１号炉「アトムアイ」の中で、「極低温中性子照射による金属の物性変化の研究」にたずさわっていた。ひろびろとした麦畑の向こうに美しい光沢をみせる卵型の原子炉ドームは、ミュンヘン市内からのアルプスの遠望と共に、忘れ難いドイツ風景として、私の心に焼き付いている。

滞在中に撮った三千枚以上のスライドは、「きみ、一体、それを何に使うんだ」とドイツの同僚にひやかされた。

９５年１月より開講予定の香川大学市民解放講座、『森　鷗外の魅力』（人と文学と科学と）で使おうと今整理しているが、ここもいくべきだった、あそこも行って写真を撮ってきたかったと、悔いがのこる。

留学以後も、ドイツには一、二度出向いたが、若い頃の「時間的・精神的」ゆとりは、なかなか再現できそうにない。

ひととゆっくり語り合う機会もないまま、その日その日に明け暮れている。

（香川大学教育学部教授　物理学専攻）

私の見たドイツ

坂出市　今田　求

昭和６１年に「ヨーロッパ農業視察団」の団長として、ヨーロッパの各国を回りました。そのなかで、ドイツのライン河畔のリューデスハイムという美しい町を訪ねました。ここはドイツのブドウとワインの発祥地です。この近くのエスバッハ修道院の庭でつくられたブドウが、順次庶民に広まっていったと聞いています。

そこではブドウ園とワイン工場を見学しました。ワインの地下倉庫には、大きな樽がいくつも並べられ、ローソクの灯がともるほの暗い穴蔵で、試飲の仕方を教えてもらいました。甘口、辛口、年代物と、飲み比べてみますと、年期のいったものが、まろやかで美味しいことがよく分かります。あれもこれもと酔うほどに試飲しました。ワイン学校のきれいな女学生の案内ですから、カフェにもいるような気分です。ローソクの灯だけのほの暗い中で、色白で、真っ赤な口紅が印象的だし、笑顔の美しい学生さんでした。まるで妖精のようで、潤んだ目は魅惑的でした。

昼食はリューデスハイムのレストランでしました。このレストランは外国からの観光客が多く、席の表示は、各国の旗で指定してあります。この日は「イギリスの旗」「アルゼンチンの旗」そして「日の丸の旗」がありました。全員が揃ったところで、支配人は各国の言葉で歓迎の挨拶をしました。

「ニッポンノミナサン、コンニチワ！」

お客様は、自国の言葉を聞くと、“オッー！”と大きな声を挙げて呼応します。それからしばらく静かな生演奏を聞きながら、ワインを片手にドイツ料理を食べました。

そのうち各国の代表的な音楽の演奏が始まりました。イギリスの音楽が演奏されますと、イギリスのお客様は全員が立って、ダンスを始めました。比較的年輩で気品のある紳士淑女が多く、清らかな情趣を描いて踊ります。次にアルゼンチンの音楽がかかりますと、アルゼンチンの人が皆フロアに出て、タンゴを踊ります。暗いレストランで男女が頬を擦り寄せて、歯切れのよいリズムに合わせて踊るタンゴは、情熱的でセクシーであります。

次に、日本の歌「さくらさくら」が演奏されました。異国で聞くと一段と良く、我々の郷愁の歌です。胸に沁み渡るようにバイオリンの旋律が流れます。

我々のグループでは、誰もダンスが出来ませんが、岩手県庁の職員さんが、見事なソプラノで、この歌を歌ってくれました。他国の人も、ナイフとフォークを置いて、静かに聞きいっておりました。

最後に、ドイツの代表的な曲“ローレライ”が演奏されました。ハイネの詩にジルヒャの曲で世界的に有名になった曲です。どこの国の人も、ローレライは小さいときに習った懐かしい歌です。全員が総立ちし、各国語での大合唱でした。哀愁を帯びたこのメロディに、郷愁を覚えるかのように、人は肩を組み合い、声高らかに歌いました。

このレストランの“ワイン”と“歌”は、我々に楽しい雰囲気と、心地よい感動を与えてくれました。そして、あの華麗なダンスを夢見て、いま習い始めております。

私の趣味　囲碁、馬術

重成　憲裕

私の“静”の趣味、囲碁、“動”の趣味、馬術はいずれもドイツと浅からぬ関係にある。馬術の方は、勿論、欧州を本場として発達したものであり、オリンピック等でも、欧州の選手が馬場馬術、障害飛越、いずれでも優秀な成績を収める事はよく知られている。

私は勿論、この様な高度の競技会とは全く関係はないが、馬術（乗馬）を、週２～３回楽しみつつ、技術の向上も目指している。具体的には、志度町の志度乗馬クラブで、障害を人馬一体（？）と成って飛越したり、近くの山道を野外騎乗したり、である。

数年前、Tübingen に居た際は、殆ど毎日、数10Ｋｍは続く森の中を走っていた。（私は「自分の馬」を彼地で初めて所有した。）森の中でヘンゼルとグレーテルの如く、道に迷う事も何回かあり、あせったものであった。あの巨大な森が、全て燃ゆるが如く紅葉しているのを眺めつつ、又、寒気の中、雪と氷を踏みつつ、走ったのも楽しい想い出である。森の中では鹿や、リスを見るのは当然であるが、乗馬の盛んなドイツの事とて他の Reiter に会う事もあり、前方を小さな女の子が栗毛の馬で疾駆しているのを発見、追いついてみれば、息子の同級生であった事もあった。彼地では乗馬は全く普通のスポーツであって、都市、田舎を問わず文字通り老若男女の親しむものである。競技会も、片や国際大会から片や、ローカルの大会まで毎週末、近隣のいずれかの町で開催されていた。残念な事に、日本ではこのスポーツはなじみも少なく、競技人口は少ない。伝統的に、彼は狩猟民族、我は農耕民族であった、という点はあるが、日本でももっと拡って欲しいスポーツである。馬術を知らない人は、乗馬についてしばしば誤解している様だ。謂く、危険である。しかしこれは全くの誤りである。サッカー、バスケットボール、に比べてはるかに安全である事は、私は保障できる、と思っている。謂く、値段が高い、これも間違っている。乗馬クラブ入会金は、香川県では五～七万円位であって、ゴルフの会員権とは比較にならない。

先程、老若男女の出来るスポーツと書いたが、これは本当である。七～八才から八十才位までの人が現にやっているのである。力もあり、若さにあふれる二十才代の人間のみのスポーツでは全くない。種々の感動と健康（就中、中年の人間には）を与えてくれるこのスポーツが、日本でも普通のスポーツになるのを願っている。

さて、囲碁については、勿論、日本が本場であるが、ドイツでも、若年層ではかなりの普及度であって、私も Tübingen では、学生達と毎週対局したものだった。日本では、これぞ正しく“オジン”の趣味の様だが、彼地にては若者の趣味で、又、結構若い女性もこの中に混っている。（日本の碁会所に若い女性はなかなか発見できない）ドイツで、しかもうら若き女性を相手に囲碁をする、というのは誠に不思議な心地であった。ある若者は、日本で棋士に成りたいが、どう思うか、と私に相談したが、彼の実力（アマチュア初～二段位）、年令（二十三才位）からして無理だ、と私は返答した。

帰国後、既に六年が経ったが、この二つの楽しみは私の人生の一部であって、私にとっては全く外国ではない第二の故郷ドイツで又、碁を打ち、馬に乗りたいと思っている。

付記：　乗馬に趣味のある方、私に電話して下さい。　０８７８（７６）３７９３

ちいさなヘーヴェルマンのおはなし

翻訳　田淵　昌太

あるところにヘーヴェルマンという男の子がいました。夜にはきまってロールベット（ベットの下面に車輪があり、乳母車のごとく転がり進む）で寝ていたのですが、昼間でも眠たくなったときには、よくそのベットにもぐりこんだものでした。でも眠たくないときには、お母さんにベットを押してもらって部屋じゅう行ったり来たりするのが大好きでした。でもヘーヴェルマン君はそれだけでは物足りないのです。

さてある夜のこと、ヘーヴェルマン君はいつものようにロールベットに横にはなったものの、なかなか寝つけずにいました。お母さんはというと、もうだいぶ前から隣の大きなベットで眠っている。「お母さん」ヘーヴェルマン君が呼びます。「動かしてよ」お母さんは夢うつつに布団から手を出し、ヘーヴェルマン君のベットを手探りで探し当てると、ゆったりと揺らし始めました。お母さんの手が疲れてきて、動きが小さくなってくるとヘーヴェルマン君は「もっと、もっと」と催促します。するとまたベットはゆうら、と揺れはじめるのでした。でも、とうとうお母さんが本当に眠り込んでしまうと、どんなに大きな声で呼んでも、もうお母さんの耳には届きません。右から左へ素通りです。

ほどなくして、お月さまが窓の中をのぞきました。お齢を召した優しいお月さまでした。窓ごしに見たヘーヴェルマン君のあまりのいじらしさに、思わず、こぼれた涙を毛皮の袖口でぬぐっています。お月さまは今の今まで、これほどかわいらしい光景を見たことがなかったのでした。ヘーヴェルマン君は目を開いたままベットに横になっています。そして片方の足を船のマストのように真っすぐ立てらせるとシャツを脱いで足の指にはさみ、帆のようにぶら下げました。それからシャツのはしっこを手で持つと、ほっぺたをふくらませて息を吹きかけたのです。するとどうでしょう。ヘーヴェルマン君をのせたベットは少しずつ動きだすではありませんか。床を走って、壁を上り、さかさまになって天井を行き、反対側の壁を下りて元のところへ戻ってきました。「もっと、もっと」そう言って、ほっぺたをふくらませ息を吹きかけると、ベットはもう一度、壁から天井をひとまわりしてきました。さいわいなことに、今はちょうど夜中で地球が逆立ちしていたおかげで、ヘーヴェルマン君は天井を走っていても、真っ逆さまに落っこちて首の骨を折るということはなかったのでした。

三回目の天井旅行を終えたときに、お月さまは不意にヘーヴェルマン君の顔をのぞきこみました。「これ、おちびさん」お月さまはこう言うのです。「まだ、もの足りないのかな」「足りない」ヘーヴェルマン君は答えます。「もっと、もっと。ねえドアを開けておくれよ。町のなかを走ってみたいんだ。みんなきっとうらやましそうにぼくを振り返るよ」「残念だが、それはできない相談だね。ドアを開けることはできないんだよ」とやさしいお月さまは言います。でもお月さまは鍵穴から長い光の手をさしのべてくださいました。その光にのってヘーヴェルマン君はお家をあとにしたのです。

通りに出てはみたものの、辺りは静まりかえっていて人っ子ひとりいません。高い家並みは月明かりにたたずみ、押し黙ったまま、町に虚ろな視線を注いでいます。どこにも人影はありません。ヘーヴェルマン君が乗ったロールベットのたてる音が、石畳の通りにがらがらと響きわたります。やさしいお月さまはヘーヴェルマン君に寄り添って、そっとまわりを照らしています。ヘーヴェルマン君はお月さまといっしょに通りから通りへと走りまわりましたが、あいかわらず人影はどこにもありません。ふと教会の横を通りかかったとき、鐘の塔の上で大きな金色のにわとりが突然、ときをつくるのを聞いて二人は立ち止まりました。「そこで何してるの」ヘーヴェルマン君はたずねます。「最初のときをつくったのさ」にわとりは答えました。「みんながどこにいるか知らない？」「みんなだって？人間はみんな眠っているよ。おれさまが三回ときをつくると、やっと連中は起きはじめるのさ」「そんなに待っていられないや」ヘーヴェルマン君はがっかりです。でも「そうだ、森へ行こう。森なら、きっと動物たちが起きているはずだよ」そう思い直したのでした。やさしいお月さまは言います。「おちびさん、満足したかね」「まだだよ、お月さま。もっともっと、明るくしてよ」そう言ってほっぺたをふくらませると、帆に風を送りました。お月さまは明るく輝きはじめます。二人は市門をくぐって野原に出ると暗い森へと入って行きました。お月さまは、狭い樹木の間をすりぬけて行くのが一苦労でした。ときには広いところまで引き返していくこともありましたが、すぐヘーヴェルマン君に追いついてきました。

森は静まりかえっていて動物たちの姿はありません。鹿も野うさぎも何にもいやしません。小さな野ねずみさえ姿を見せることはありませんでした。でも、とにかくもっと先へ行ってみることにしました。もみの木立を抜け、ぶなの林をくぐり、道は上がったり下がったりします。やさしいお月さまは並んで歩きながら茂みをあちこち照らしてくださいましたが、動物たちの姿はいっこうに見当たりません。ただ小さなねこが、ならの木の上に腰をおろして目を光らせているだけです。二人は立ち止まりました。「あれはヒンツだよ。ぼくは知っているんだ。あいつ、目を光らせてお星さまになったつもりなんだよ」とヘーヴェルマン君は言いました。さらに先へ進んでいくと、さっきのねこが枝から枝へ飛び移りながらついてくるのです。「そこで何してるんだい」ヘーヴェルマン君は聞いてみました。「森のなかを明るくしているのさ」とねこが答えました。「ほかの動物たちはどこにいるか知ってる？」とたずねると「ほかの動物たちだって？みんな寝てるよ！」またもう一本、木を飛び移って「ほら、いびきが聞こえてくるだろう」「なあ、おちびさんや」やさしいお月さまが言いました。「そろそろ満足したかい」「いや、まだだよ。さあ、もっともっと照らしておくれよ、お月さま！」そしてほっぺたをふくらませて帆に息を吹きかけ、お月さまに照らされて森を出ると、荒れ野を越えて大地の果てまでやってきました。そして、まっすぐ空へと入っていったのです。

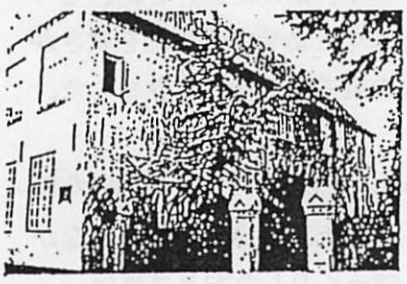
空は今までとは違って愉快なところでした。お星さまはみんな起きていて、見開いた瞳をきらきら輝かせ、夜空いっぱいにまたたいていました。「どいた、どいた」と叫びながらヘーヴェルマン君はお星さまの集いに割って入りました。びっくりしたお星さまは、

みんな蜘の子を散らすように夜空から落っこちてしまいました。そこで、やさしいお月さまはこう言いました。「おちびさん、もうそろそろいいだろう」「いや、まだだよ。もっともっと！」そう言うがはやいか、あっという間にヘーヴェルマン君はお月さまのお鼻のあたりを横切って走り抜けたのです。おやおや、お月さまのお顔はうす黒く汚れてしまいました。「何てことだ！」とどなったかと思うと、お月さまは続けざまに三回くしゃみをし、「ものにもほどがある」と怒って、明かりをおとしてしまいました。このときお星さまたちはみんな、そろそろ眠りはじめていました。空がどんどん暗くなっていきます。お星さまたちがきらきら光る目をすっかり閉じてしまったからです。「暗いよ、お月さま、もっと照らしてよ」とヘーヴェルマン君は言うのですが、お月さまもお星さまもどこへ行ったのか姿が見えません。みんな眠りに帰ってしまったのです。ヘーヴェルマン君は、なんだか心細くなってきました。だって広い大空のなかでひとりぼっちになってしまったのですから。とにかくシャツで作った帆のすそを持つとほっぺたをふくらませて息を吹きかけました。右も左もわからないのです。行ったり来たり、あちこち走りまわりました。でもヘーヴェルマン君に注目してくれる人は誰もいません。動物たちやお星さまだって、誰も見ていてはくれないのです。

そのときはるか下の空のへりに、ヘーヴェルマン君を見上げている明るく丸い顔がありました。ヘーヴェルマン君はてっきり、やさしいお月さまがまた昇ってきてくれたと思い「明るくしてよ、お月さま、灯りをつけてよ！」と叫びました。そしてほっぺたをふくらませて帆に風を送ると、大空を突っ切って真っすぐそちらへ急ぎました。でもその丸い顔はお月さまではなくて、海から昇ってきたお日さまだったのです。お日さまは「おい、ちびすけ」と大声で呼ぶと、燃えさかる炎の目でヘーヴェルマン君を見つめました。「おまえはいったい、わしのこの大空で何をしとるのだ？」と言ったかと思うと、それ、一、二の、三、ヘーヴェルマン君をつまみあげてドボーン、海のまん真ん中へ放り込んでしまいました。そこでヘーヴェルマン君は犬かきを実地訓練するはめになったのです。

それから？どうなったかって？おぼえていないのかい。おまえと父さんが乗ったボートが通りかかって助けてあげなかったら、ヘーヴェルマン君は犬かきどころか、おぼれることまで実地訓練していたかもしれないってことさ。

原作　　DER KLEINE HÄWELMANN
Ein Kindermärchen
(Theodor Storm　1849)



↑シュトルムの家
（フーズム市）

FENSTER

【ドイツの歴史】

フランク王国時代	375	ゲルマン民族大移動始まる
	486	クロービス、フランク王国を建設
	800	カール大帝戴冠
	843	東フランク王国成立
	911	カロリング朝東フランク王国滅亡 ドイツ王国成立
神聖ローマ帝国時代	962	オットー大帝戴冠、神聖ローマ帝国成立
	1226	ドイツ騎士団の東方植民始まる
	1254	ライン都市同盟の成立
	1283	ハンザ同盟の成立
	1356	カール４世、金印勅書を公布 七大選帝侯の成立
	1376	シュヴァーベン都市同盟の成立
	1517	ルターの宗教改革始まる
	1522	騎士の反乱
	1524	ドイツ農民戦争(~1925)
	1555	アウグスブルクの宗教和議
	1618	30年戦争(~1648)
	1701	プロイセン王国成立

ドイツ統一へ	1813	対仏ドイツ解放戦争(~1815)
	1814	ウィーン会議(~1815)
	1862	ビスマルク体制(~1890)
	1866	プロイセン・オーストリア戦争
	1870	プロイセン・フランス戦争
現代	1888	皇帝ヴィルヘルム２世即位
	1914	第一次世界大戦(~1918)
	1918	皇帝退位 ドイツ降伏
	1919	ヴァイマール共和国成立
	1934	ヒトラー、総統となる
	1936	ドイツ・オーストリア合併
	1939	ドイツ・イタリア軍事同盟 独ソ不可侵条約成立
	1939	第二次世界大戦(~1945)
	1941	独ソ開戦
	1945	ベルリン陥落、ドイツ無条件降伏 米英仏ソによる分割占領

現代	1946	ニュルンベルク裁判終わる
	1948	ベルリン封鎖＝ベルリン空輸
	1955	東西両ドイツ、各々に主権を回復
現代	1989	ベルリンの壁撤去、東ドイツ国民の国外旅行自由化
	1990	東西ドイツ統一

◆ 神聖ローマ帝国

東フランク王国の三代目オットーは、962年、ローマ教皇に皇帝として戴冠を許され、神聖ローマ帝国が誕生し、これ以後ドイツ王はローマ皇帝の継承権をもつ。ドイツ皇帝時代は13世紀中期まで続き、黄金時代を迎えた。一方、リューベックを盟主とするドイツ・ハンザ同盟の各自由都市、ドイツ騎士団、ライン都市同盟など、市民の活躍もめざましかった。こうしたドイツとしての統一意識のない分立主義は現在まで続いているといわれるが、このため各地方と都市の経済や文化は個性を保ち、ドイツ全土に宮殿と大小の首都がおかれた。そうした国の形成の特徴は、東フランクでは各民族大公国の連邦の形をとり、神聖ローマ帝国は皇帝と教皇との対立が領邦の分立へと進んでいった。1356年、カール４世は、金印憲章を発布し、選帝侯制を制定する。

◆ 帝国自由都市とハンザ同盟

現在でも誇りを込めて自らを自由ハンザ都市と呼ぶハンブルクやブレーメン、ロマンチック街道沿いの帝国自由都市ローテンブルクなどは地方諸侯の勢力から離れ、開市権や課税権、築城権や流血裁判権を持った独立国であった。これは、もともと諸侯の力が強い中世ドイツで、皇帝が諸侯に対抗するため、経済力を持って台頭し始めてきた都市に自治権を与えたことによる。

各都市は、諸侯に対抗したり、経済上の理由で近隣の都市と同盟を結んだ。この都市同盟には、ハンザ同盟、シュヴァーベン同盟、ライン同盟などがあり、特に有名なハンザ同盟は、ドイツ商人（ハンザ加盟都市商人）の擁護が目的で、バルト海、北海沿岸地域に強大な勢力権を築き上げ、ドイツ最大の都市同盟になっていた。

（フリーダム　⑮　ドイツ自遊自在　1993年７月１日　３版発行
ＪＴＢ日本交通公社出版事業局発行　78頁～79頁より）

【活動行事報告】

香川日独協会事務局

１９９３年

11月27日：『1993年度総会・ミニ講演会・懇親会』主催［高松グランドホテル］

香川県国際交流課より中川宜興様、高松市国際交流協会より蓮井宣昭様を来賓に、また甲斐守様よりご紹介のあった観音寺にホームステイ中のフェンツァーン嬢を迎え、４７名出席で開催されました。会計報告・行事報告に続き、会則の一部変更案（会計年度の変更・夫婦会員の新設）が事務局より提出され賛成多数で可決されました。その後香川県国際交流員のヒンメルシュタイン氏の流暢な日本語によるミニ講演を拝聴し、懇親会で会員相互の親睦を深めました。

１９９４年

４月１日　『会員名簿』発行（４月11日会員へ配布）

２日　『春の例会』主催［ヴェルデカーサ］

ドイツの国賓用迎賓館料理支配人ダニエル氏及び同氏の来日に尽力された松本功氏を来賓に迎え、４４名の参加で実施しました。ダニエル氏は、前年天皇皇后両陛下が訪独された時のレセプションの主任シェフをつとめられ、彼のお出ししたドイツ家庭料理を陛下が大変お気に召して２度もお代わりされたという経歴とお伺いしていましたので、いかめしい方を想像しておりましたが非常に気さくなお人柄でした。なおこの例会までの時間は、秋山榮一様の案内で金刀比羅宮を観光されました。賛助会員の久本酒店のご厚意で、ワインの試飲会も催し、和気あいあいのうちに20時半に閉会となりました。

（注）ダニエル氏につきましては、別頁に再掲します。

６月25日　『理事会』開催［リーガホテルゼスト高松］

この理事会での審議事項及び決定事項は次のとおりです。

①９月４日開催のチター音楽祭後援決定、②古市壽子理事辞任承認、③会費未納会員の取り扱いに関しては事務局に一任、④会報第３号編集責任者を藤木康夫様に依頼、⑤８月３日に大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事の講演会を開催、⑥姉妹縁組正式調印のため独日協会ボンの代表団を10月中旬に迎えること。

８月３日　『大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事グリューバー氏講演会・歓迎懇親会』主催［ホテル川六］

1993年10月に着任されたドイツ総領事を高松に迎え、"Deutschland und

die deutsch-japanischen Beziehungen"（ドイツ及び日独関係）の演題でお話いただきました。総領事館よりいただいた講演原稿をもとにした邦訳をお配りしましたので、ドイツ語に不得意な方にもお楽しみいただけたかと思っています。講演後、活発な質疑応答・意見交換も行われ、部屋をかえての歓迎懇親会にも４０名程参加し盛り上がった一夕でした。

（注）総領事の講演内容は、別頁に再掲してあります。

9月４日　『チター音楽祭』［セントラルホール・ウイング］

内藤チターアカデミー高松校主催、在日オーストリア共和国大使館・在日ドイツ連邦共和国総領事館後援のこのチター音楽祭に、前年に引き続き日独協会も２回目の後援に加わらせていただきました。前年よりも小さなホールでの演奏会ですので昼夜（14時、18時）２回の公演となりました。

10月17日　『ボン独日協会と香川日独協会との姉妹協会提携調印式』挙行

［ホテル川六］

ボン独日協会ディーツ会長外４名が来県され、ボン独日協会ディーツ会長、メンヒ副会長兼事務局長と香川日独協会細川会長、羽白事務局長がそれぞれ姉妹協会提携書に署名し、ボン独日協会と香川日独協会との間で姉妹協会の提携が成立しました。

調印式に引き続いて、ボン独日協会代表団の歓迎会を催しましたが、香川日独協会会員も８０名余が参加し、大変和やかなうちに両協会の交流を深めました。

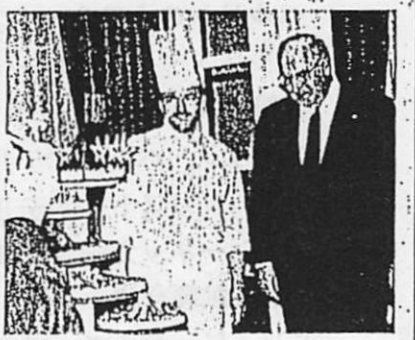
（注）調印式の模様などについては、別頁に再掲してあります。

ダニエル氏の横顔

香川日独協会

シェフのダニエルさん迎え

2日に春の例会開く



ゲストとして参加するダニエルさん（右はコール首相）＝資料

香川日独協会（会長・細川清香川医科大副学長、二百人）は、ドイツの新鋭シェフ、ダニエル・ハインリヒ・ウドさんをゲストに迎え、四月二日午後六時から高松市南新町の「ヴェルデ・カーサ」で春の例会を開催。レセプションの主任シェフを務めた。ダニエルさんがメニューに加えた家庭料理を、陛下がことのほかお気にめし、二度お代わりされたというエピソードもある。

例会では、料理を楽しみながら、ダニエルさんから世界の国賓を迎えての裏話などが聞ける。

参加費は会員三千円、会員以外は五千円。問い合わせは、同会事務局（三木町池戸一七五〇―一、香川医大ドイツ語研究室内＝〇八七八〇〇八二二）まで。

（1994．3．30付　四国新聞）

［ダニエル氏］の履歴書

Ⅰ．氏名	ダニエル．ハインリッヒ・ウド（DANIEL. Heinrich Udo）
生年月日	１９５８年１０月２４日
出生地	ハイガー／ディルクライス
住所	Arndtstraße 27 53340 Meckenheim
国籍	ドイツ
宗教	キリスト教（プロテスタント）
家族関係	既婚、子供二人
Ⅱ．教育および修業	
学校教育	職業高等専門学校終了資格
職業教育	
1974―1977	シュタイゲンベルガー・リッタース・パーク・ホテルにて料理人として修行
1977―1978	家業の経営で食肉業（製造加工販売）修行

Ⅲ. 職歴

1978—1979	家業の食肉業経営（製造加工販売）で食肉業および調理人
1979—1980	軍料理人として兵役義務につく
1980—1981	ベルリンのホテルおよびレストラン従業員のための訓練センターにて教官助手
1981	ベルリンのホテル・クアフュルステンダム食料貯蔵室シェフ ベルリン・ターゲロートのホテル・イーグル調理室シェフ 客船ミス・アスター号、ソース担当シェフ
1982	ベルリン、ペンタホテル、野菜切り（？）担当シェフ
1983	ボン、ブリストルホテル副シェフ
1984	ライン—ネッカー手工業会議所にて料理マイスターの講習および試験合格
1984—1988	ボン、バート・ゴーデスベルクのドイツ政府迎賓館「ラ・ルドゥット」調理室シェフ
1988—1990	ケルン、マリティムホテル料理支配人
1990	ドイツ連邦共和国国賓用ホテル、シュタイゲンベルガーホテル株式会社、迎賓館ペータースベルク料理支配人

【参　考】

ボン独日協会(Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V)
C/O Marianne Mönch
Auf dem Köllenhof 47　53343
Wachtberg-Ließem
Deutschland (Germany)

独日協会ボン　DJG Bonn

独日協会ボン（W. ディーツ会長、H. メンヒ副会長・常務理事）は、1976年5月に設立されて以来、日本についての知識を広め、かつ深めること、そして相互理解の促進を目指して活動している。講演会、映画鑑賞会、小旅行などの催し物を年間30～35回ほど開催しており、今では会員数も 485名（うち学生 140名）を数える。また1993年から香川日独協会と友好協力している。

Die DJG Bonn(Präsident: W. Dietz; Vizepräsidentin und Geschäftsführerin: M. Mönch) wurde im Mai 1976 gegründet. Ihre Ziele sind die Verbreitung und Vertiefung der Kenntnisse über Japan und die Förderung des gegenseitigen Verständnisses. Jährlich 30-35 Veranstaltungen. 485 Mitglieder.

【編集後記】

この８月に会報第３号の発行を引き受けさせていただきました。がこのような作業は、初めての経験でありましたし、私は、あまり会の行事にも参加いたしておりませんでしたので、会員の皆様方を殆ど存じあげておらなかったものですから、原稿のご依頼が的確にできませんでした。それにもかかわらず、沢山の会員の皆様から原稿をいただきありがとうございました。お陰を持ちまして、大変豊かな内容になりましたが、不慣れな編集で出来栄えが今一つということとなり大変申し訳なく思っております。

会報第３号をご一読いただき、ご意見、ご提案を賜りますようお願い申し上げます。

なお、この第３号の編集にあたりましては、第２号の方針に準じさせていただきました。

追って、表紙に使いました写真は、ボン独日協会から贈られた写真の一葉で、「ボンの旧市庁舎と市庁舎広場」です。撮影は、ボン独日協会会員のWilly Jahn様です。

（藤本　康夫）

香川日独協会会員数
（1994年11月 7日現在）

賛助会員	39名
名誉会員	7名
学生会員	22名
普通会員	102名
夫婦会員24組48名	
計	218名

香川日独協会会報　第３号
1994年10月発行
発　　行：香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒761-07　香川県木田郡三木町池戸1750-1
香川医科大学ドイツ語研究室内
TEL(FAX兼用) 0878-91-0822
発行責任者：細川　清
編　　集：尾崎　浩、多田　佳代、藤本　康夫
ワープロ文責：藤本　康夫
印　　刷：香川日独協会事務局